市内遺跡発掘調査報告書３

例　　言

1　本書は主に令和２年度に岩沼市内で実施した発掘調査の成果をまとめたものである。

2　出土品整理、及び報告書作成については、2021 年１月 10 日から３月 10 日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。また本書の刊行は国庫補助事業として実施した。

3　本書のトレンチ番号は現地調査時に付したものを使用した。また検出遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＩ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット

4　本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・武田裕光・兼田芳宏が担当した。執筆分担については下記の通りである。

川又：第Ⅱ章２・３・４

武田：第Ⅰ章、第Ⅱ章１-B・C・７・８・９

兼田：第Ⅱ章１-A・５・６

5　発掘調査の実施にあたっては、生田 和宏氏、斎藤 和機氏、白鳥 良一氏、太田 昭夫氏、千葉 宗久氏、廣谷 和也氏、村田 晃一氏をはじめとし、宮城県教育庁文化財課、各事業主・地権者の方々からご協力をいただいた。

6　土層、及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）に拠った。

7　発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の地理的・歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅱ章　令和２年度の調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

１．原遺跡（第 15 地点） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

２．かめ塚古墳（第２次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

３．かめ塚西遺跡（第１次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

４．中ノ原遺跡（第１地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

５．鵜ヶ崎城跡（第 22 地点） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

６．下野郷館跡（第 31 地点） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

７．鵜ヶ崎城跡（第 23 地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

８．鵜ヶ崎城跡（第 24 地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

９．鵜ヶ崎城跡（第 25 地点） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

引用・参考文献

抄録

挿 図 目 次

第1図　岩沼市遺跡地図 …… 2
第2図　原遺跡（第 15 地点）位置図 …… 3
第3図　トレンチ配置図・基本土層図 …… 4
第4図　3・4・5トレンチ東壁断面図 …… 5
第5図　1トレンチ検出遺構平面図 …… 6
第6図　1・2トレンチ出土遺物 …… 7
第7図　原遺跡（15 地点）グリッド図 …… 8
第8図　原遺跡（15 地点）全体図 …… 9
第9図　SB01 土層断面図 …… 10
第 10 図　SD01・05・07 土層断面図 …… 11
第 11 図　SD01・05・07 出土遺物 …… 13
第 12 図　SK01・02・03 土層断面図 …… 14
第 13 図　SK01・02 出土遺物 …… 15
第 14 図　かめ塚古墳位置図 …… 21
第 15 図　かめ塚古墳全体図 …… 22
第 16 図　1トレンチ周濠土層断面図 …… 23
第 17 図　4トレンチ周濠土層断面図 …… 24
第 18 図　かめ塚古墳の暫定値計測位置図 …… 25
第 19 図　かめ塚西遺跡位置図 …… 28
第 20 図　かめ塚西遺跡トレンチ配置図 …… 28
第 21 図　1トレンチ東壁土層断面図 …… 29
第 22 図　4トレンチ土層断面図 …… 30
第 23 図　13トレンチ西壁土層断面図 …… 32
第 24 図　13トレンチ出土遺物 …… 32
第 25 図　16トレンチ出土遺物 …… 33
第 26 図　19トレンチ土層断面図 …… 34
第 27 図　19トレンチ出土遺物 …… 34
第 28 図　20トレンチ出土遺物 …… 35
第 29 図　中ノ原遺跡位置図 …… 41
第 30 図　中ノ原遺跡トレンチ配置図
・土層柱状図 …… 41
第 31 図　鵜ヶ崎城跡（22 地点）位置図 …… 42
第 32 図　鵜ヶ崎城跡（22 地点）トレンチ配置図
・基本土層図 …… 43
第 33 図　下野郷館跡（31 地点）位置図 …… 44
第 34 図　下野郷館跡内での調査箇所 …… 44
第 35 図　下野郷館跡（31 地点）トレンチ配置図
・基本土層図 …… 45
第 36 図　鵜ヶ崎城跡（23 地点）位置図 …… 46
第 37 図　鵜ヶ崎城跡（23 地点）トレンチ配置図
・土層柱状図 …… 46
第 38 図　鵜ヶ崎城跡（24 地点）位置図 …… 47
第 39 図　鵜ヶ崎城跡（24 地点）トレンチ配置図
・土層柱状図 …… 47
第 40 図　鵜ヶ崎城跡（25 地点）位置図 …… 48
第 41 図　鵜ヶ崎城跡（25 地点）トレンチ配置図
・土層柱状図 …… 48

【令和２年度 調査体制】

教育長：百井　崇　　教育次長：石垣　茂
生涯学習課長：沼田　輝明　　課長補佐：菊地　英樹
生涯学習課文化財係　主幹兼係長：川又　隆央、主幹：武田　裕光、
技術主査：兼田　芳宏（神奈川県派遣職員）
塩谷　信幸、齋藤 新彌、渡辺 幹雄（会計年度任用職員）
現地調査参加者　川島 秀義（日本考古学協会員※原遺跡第 15 地点）
浅川 俊夫、近江 幸次、小野 一志、平 信弘、高橋 舜市、玉山 俊彦、丹野 章、
永沼 秋雄、新田 豊記、早坂 忠正、森 公利（岩沼市シルバー人材センター）
※かめ塚古墳・かめ塚西遺跡
整理作業専従者　菅原 健

第Ⅰ章 遺跡の地理的・歴史的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道４号と同６号、JR 東北本線と同常磐線の合流地点であり、交通要衝の地として知られている。

縄文時代の遺跡は、岩沼西部丘陵・長岡丘陵・二木・朝日丘陵に存在する。調査が実施された遺跡は少ないが、鵜ヶ崎城跡【23】では縄文時代早期末～前期、山畑南貝塚【９】では縄文時代中期～後期、下塩ノ入遺跡【14】では縄文時代後期～晩期の土器が確認されている。

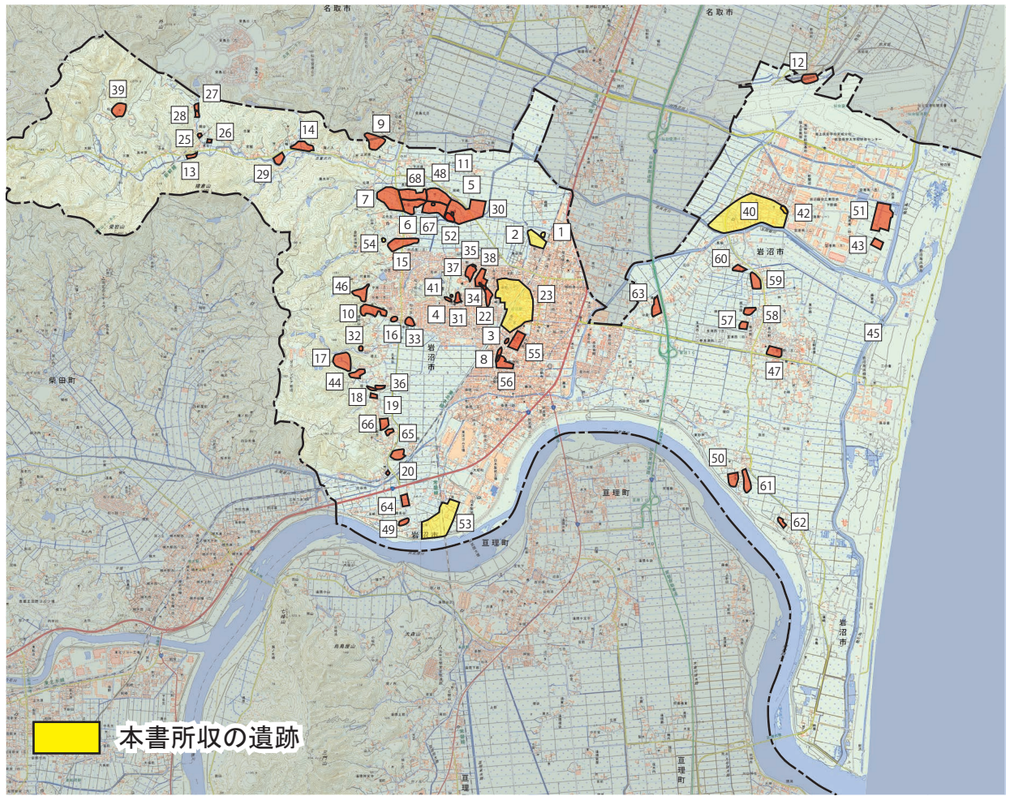
弥生時代の遺跡も調査が実施された遺跡は少ないが、鵜ヶ崎城跡では弥生時代中期後葉と考えられる竪穴建物跡を検出し、十三塚式に比定される弥生土器、及び石庖丁などの石器が出土している。また朝日古墳群【37】では弥生時代後期の天王山式の土器が確認されている。このほか原遺跡【53】でも出土量は少ないが、石庖丁や土器片が出土している。

古墳時代では集落遺跡として北原遺跡【７】、熊野遺跡【15】で前期集落が、原遺跡では後期から終末期の集落が確認されている。高塚古墳は、岩沼市史編纂事業に伴い調査を実施した県指定史跡かめ塚古墳【１】において、くびれ部付近の周溝の底面から木製鋤が出土している。横穴墓は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の凝灰岩層露頭面で多く造営され、丸山横穴墓群【３】、二木横穴墓群【８】、長谷寺横穴墓群【10】、平等山横穴墓群【16】、引込横穴墓群【31】、土ケ崎横穴墓群【22】などで調査が実施され、各横穴墓群から須恵器、土師器、金属製品、玉製品、人骨などが出土している。

古代の遺跡では、原遺跡の調査が近年注目を集めている。これまでの調査では掘立柱建物跡、材木塀跡、竪穴建物跡、溝跡などの遺構が発見され、また多数の土師器・須恵器などの遺物が出土している。特に８世紀前半～後半にかけて機能していた掘立柱建物では、建物の主軸方位が正方位を強く意識していることが判明しており、須恵器円面硯の出土と併せて『延喜式』にみえる「玉前駅家」、あるいは多賀城跡出土木簡に記載される「玉前剗」が存在していた可能性が推量される。

中世の遺跡は、鵜ヶ崎城跡、朝日古墳群、上根崎遺跡【30】、朝日遺跡【38】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、丸山遺跡【55】および刈原遺跡【61】などが確認されている。このうち下野郷館跡では志賀沢川沿いで実施した調査において、在地の白石古窯跡群の製品を中心とする中世遺物を多数出土しており、中世段階の集落が河川沿いに展開している可能性が考慮されるようになった。

近世の遺跡は、現在の岩沼市の姿と大きく関係していることから多数の調査成果がある。鵜ヶ崎城跡では第１地点の調査が東北福祉大学によって調査が行われている。ここでは地鎮関連の遺構として小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらけで蓋をするように被せた状態のものを確認している。また竹駒神社境内遺跡【56】では、礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、神事関連遺構などを発見し、近世陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、金属製品、及び木製品が出土した。本調査により、向唐門の地下構造のほか、江戸期における社寺境内の空間利用のあり方を確認し、はじめて考古学的な手法により、これまで伝承、言い伝え、棟札、及び古文書などによって語られてきた竹駒神社境内変遷の歴史の一端が明らかとなった。



第１図　岩沼市遺跡地図

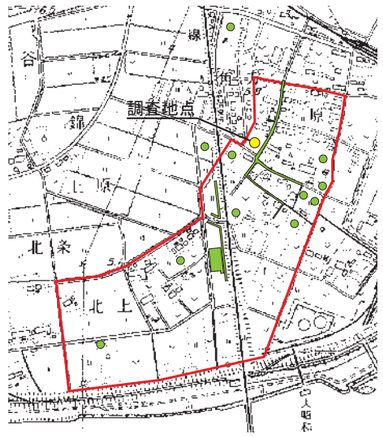
表１　岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	かめ塚古墳	古墳	25	八森A遺跡		47	新田東遺跡	奈良・中世・近世
2	かめ塚西遺跡	弥生・古墳	26	八森B遺跡	縄文	48	長塚北遺跡	縄文・古墳・古代
3	丸山横穴墓群	古墳	27	銅谷A遺跡	縄文	49	南玉崎遺跡	縄文・古代
4	白山横穴墓群	古墳	28	銅谷B遺跡	縄文・近世	50	西須賀原遺跡	古代・中世・近世
5	新明塚古墳	古墳	29	新宮下遺跡	縄文・近世	51	高大瀬遺跡	古墳・古代
6	杉の内遺跡	弥生・古墳・古代	30	上根崎遺跡	縄文	52	長徳寺前遺跡	近世
7	北原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	31	引込横穴墓群	縄文・弥生・古代・中世	53	原遺跡	古墳・古代
8	二木横穴墓群	古墳	32	古閑山遺跡	古墳	54	中ノ原遺跡	中世
9	山畑南貝塚	縄文・古代	33	新田遺跡	弥生・古墳	55	丸山遺跡	中世・近世
10	長谷寺横穴墓群	古墳	34	石垣山横穴墓群	古墳	56	竹駒神社境内遺跡	中世・近世
11	長塚古墳	古墳	35	鷲崎横穴墓群	古墳	57	新筒下遺跡	古代
12	孫兵衛谷地遺跡	古墳前	36	畑堤上貝塚	縄文・古墳・古代	58	沼前遺跡	古代
13	大日遺跡	縄文	37	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	59	西土手遺跡	中世
14	下塩ノ入遺跡	縄文	38	朝日遺跡	古墳・古代・中世	60	前條遺跡	古代
15	熊野遺跡	古墳・古代	39	岩蔵寺遺跡	縄文・古代・中世	61	刈原遺跡	古代
16	平等山横穴墓群	古墳	40	下野郷館跡	古墳・古代・中世・近世	62	高原遺跡	中世
17	新館跡	中世	41	白山塚	近世？	63	上中筋遺跡	古代・中世
18	畑堤上横穴墓群	古墳	42	舘外遺跡	古代	64	樋遺跡	古代・中世
19	根方泉遺跡	弥生・近世	43	にら塚遺跡	古墳・古代	65	柳遺跡	古墳・古代
20	長谷小館跡	室町	44	新館跡前遺跡	縄文・古代	66	台遺跡	縄文・弥生
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	45	貞山堀（木曳堀）	近世	67	長塚遺跡	縄文・古墳
23	鵜ヶ崎城跡	縄文・弥生・中世・近世	46	竹倉部遺跡	弥生・古墳・古代	68	上小渕遺跡	弥生・古墳・古代

第Ⅱ章　令和2年度の調査成果

１．原遺跡（第 15 地点）

Ａ．確認調査



第２図　原遺跡（第 15 地点）位置図

原遺跡は、仙台平野南部域の沖積地を形成した阿武隈川下流域北岸の自然堤防上に立地する古墳、古代の官衙関連施設・集落跡である。これまでの発掘調査で大型の掘立柱建物跡や材木塀、土師器や須恵器、円面硯などが発見され、文献に登場する「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡に記された「玉前剡」に推定されている遺跡である。

対象地は遺跡範囲の北側に位置し、JR 常磐線の東側、原集落西側の畑で、現況は雑種地となっている。

調査に至る経緯については、令和２年３月 17 日付けで宅地造成工事に関する協議書が提出され、同日現地調査を行ったが遺物の表採はなかった。工事の概要については、分筆し 10 区画の宅地として分譲販売する計画であり、竹等植栽の伐根、既存ブロック塀の撤去、上下水道配管の引込み工事を行うものであって、既存施設の撤去は新たな掘削が伴わないことから、遺跡に与える影響は軽微と考えられるため工事立会とするが、伐根及び給排水管布設部分は新たな掘削となるため、確認調査を実施する必要が生じたためである。

調査は令和２年６月 10 日より開始し、北側給排水管布設部分の東側に東西３ｍ、南北 10 ｍのトレンチを１本、中央に東西２ｍ、南北９ｍのトレンチを１本、西側伐根部分の北側・中央・南側にそれ

空中写真（北から）

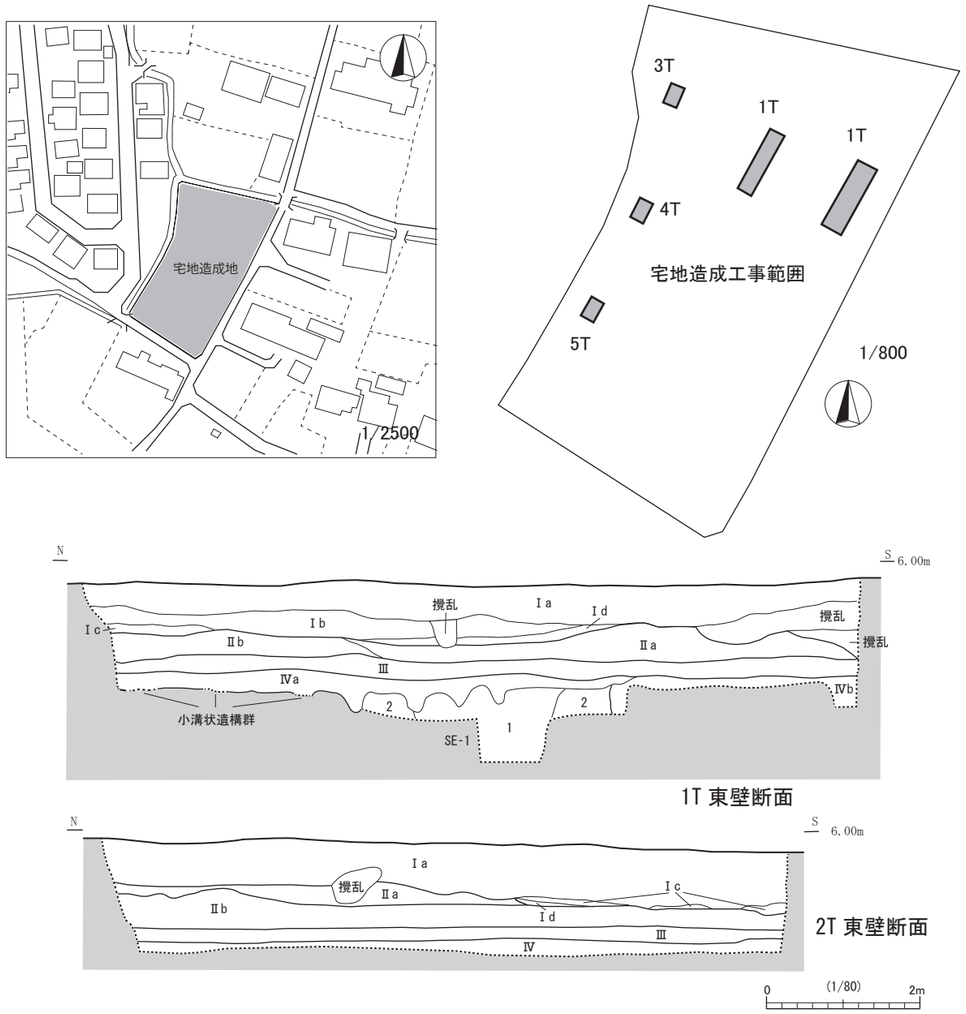
１．原遺跡（第 15 地点）

ぞれ東西２ｍ、南北２ｍのトレンチを設定し、重機を用いて表土を排斥して現地表面から 130 ～ 234 ㎝下までのⅠ～Ⅳ層を、順次重機と人力によって掘削及び精査を行った。

その結果、１トレンチからは小溝状遺構群と井戸跡１基、土坑１基が検出され、Ⅳｂ層からは焼土・炭化物と共に、土師器・須恵器の破片が出土した。また２トレンチからはピット１口が検出された。

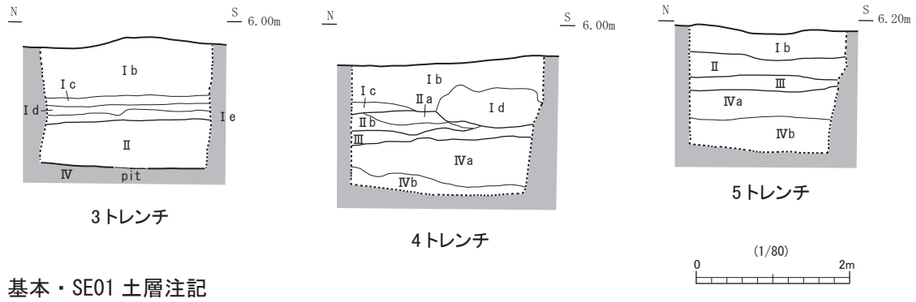
各トレンチの土層観察から調査地点の基本土層は、Ⅰａ層は灰白色砂礫で旧建物部分の盛土層、Ⅰｂ層は灰黄褐色粘質シルトの表土層で、西側へ行くほど根の攪乱によりしまりがなくなる。Ⅱab 層は黒褐色粘質シルト、Ⅲ層は黒褐色シルト、Ⅳab 層は黄褐色砂質シルトで、何れもほぼ水平に堆積しているが、１トレンチ部分のⅣｂ層は層中に炭化物・焼土粒を含み、下方は畝状に大きく乱れ井戸跡を切っている。

これらの遺構・土層記録作業、写真撮影後の 20 日に埋戻しを行い、発掘資材を撤去して同日調査を終了した。



第３図　トレンチ配置図・基本土層図（1T 東壁・2T 東壁）

１．原遺跡（第 15 地点）



基本・SE01 土層注記

No.	土色		土質	備　　考
Ⅰa	灰白色	10YR7/1	砂礫	整地層　瓦礫・山砂・砕石を含む。
Ⅰb	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	表土　炭化物を少量含む。しまりやや強い。
Ⅰc	暗灰黄色	2.5YR5/2	細砂	しまり弱い。
Ⅰd	暗青灰色	5B4/1	粘質シルト	酸化鉄分を含む。しまり強い。
Ⅰe	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄褐色砂質シルト粒を少量含む。
Ⅱa	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	旧耕作土　黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや強い。
Ⅱb	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	旧耕作土　しまりやや弱い。
Ⅲ	黒褐色	10YR2/2	シルト	炭化物・焼土粒を少量含む。しまりやや強い。
Ⅳa	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト	炭化物・焼土粒をやや多く含む。しまりやや強い。
Ⅳb	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト	酸化鉄分を含む。しまりやや強い。
1	緑灰色	10G5/1	粘土	酸化鉄分を含む。グライ化。
2	にぶい黄橙色	10YR7/2	砂質シルト	酸化鉄分を含む。しまりやや弱い。

第４図　３・４・５トレンチ東壁断面図

１トレンチ全景（南から）

１トレンチ東壁（南西から）

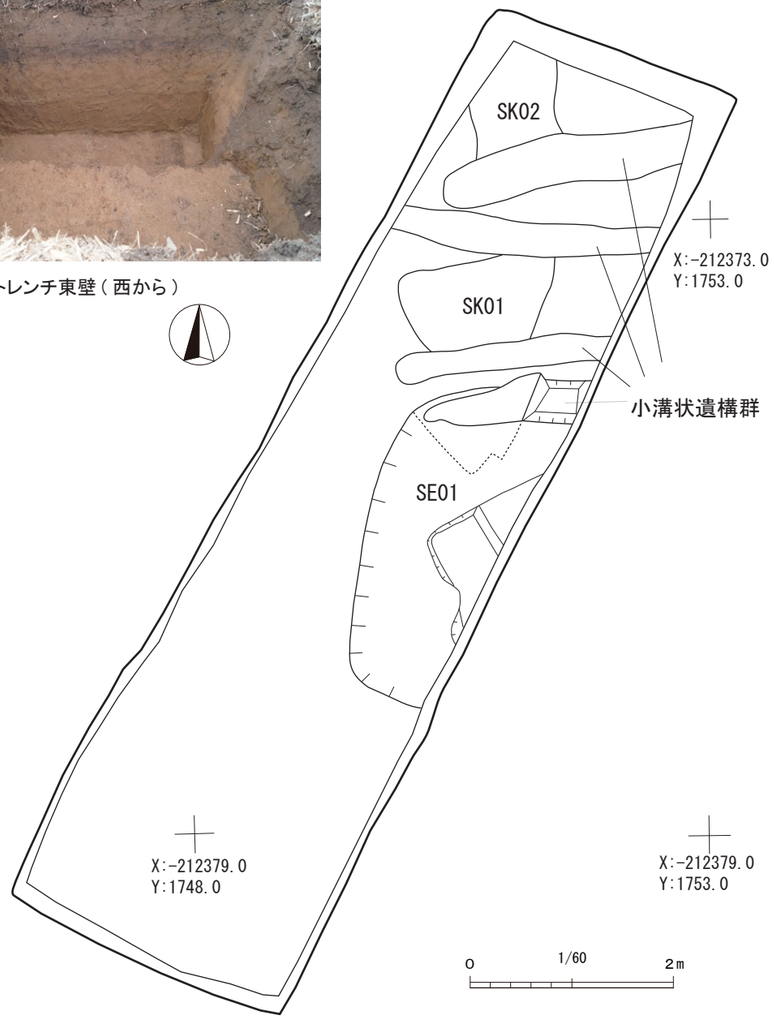
２トレンチ全景（北から）

２トレンチ東壁（北西から）

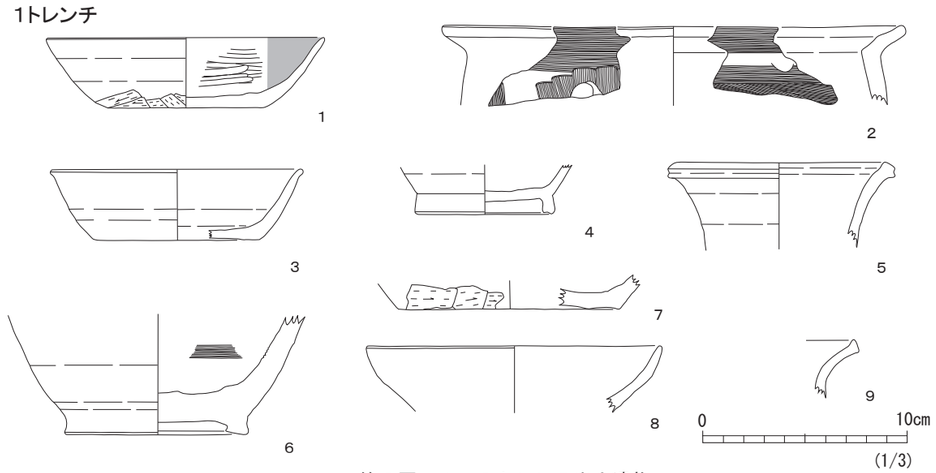
３トレンチ東壁（西から）

４トレンチ東壁（西から）

５トレンチ東壁（西から）



第５図　１トレンチ検出遺構平面図



第６図　１・２トレンチ出土遺物

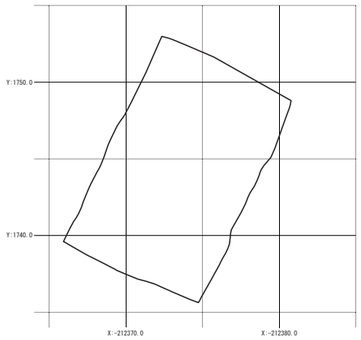
１・２トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　　面	内　　面	残　存	法量(cm)			写真番号
							口径	底径	器高	
1	SE01 サブトレ	土師器	坏	ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ、体部下端手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/6	13.6 (推定)	7.6 (推定)	3.4	1
2	SE01 サブトレ北側	土師器	甕	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	口縁部破片	22.6 (推定)			2
3	1Tr北側 精査	須恵器	坏	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ	全体の1/10	12.3 (推定)	8.0 (推定)	3.4	3
4	1Tr中央 西壁際精査	須恵器	碗	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後ロクロナデ	ロクロナデ	底部破片		6.8 (推定)		4
5	1Tr北側 精査	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	10.2 (推定)			5
6	SE01 サブトレ中央	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ・ヘラ切り後ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラナデ・底面ナデ	底部破片		8.8 (推定)		6
7	1Tr北側 小溝状遺構	須恵器	甕	体部下端ヘラケズリ・底面ヘラケズリ、ナデ	ナデ	底部破片		10.8 (推定)		7
8	SE01 サブトレ	黒色土器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	14.4 (推定)			8
9	SE01 サブトレ北側	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片				9

Ｂ．記録保存調査

１．調査に至る経緯と調査方法

前述の確認調査に基づき６月 23 日開発者側と保存協議を行った結果、遺構・遺物が発見された１・２T 周辺については、北側進入道路計画の位置変更が無理なため、道路部分 148 ㎡について記録保存の発掘調査を行うこととし、それ以外の場所については慎重工事とし、埋設管等の工事の際に立ち会うこととして、７月 21 日開発者側と発掘調査委託契約を結び、７月 31 日より現地調査に入った。



第７図　原遺跡（15 地点）グリッド図

調査は重機による表土掘削を８月１日まで行い、遺構確認面精査を６日まで行った結果、確認調査時の井戸跡、小溝状遺構群、土坑の他に掘立柱建物跡が検出されたため、これら遺構の精査を 12 日まで行い、各遺構の実測、及び写真撮影を 27 日まで行い、全体写真を撮って、９月６日より重機による埋戻しを行い、８日に現地調査を終了した。

２．発見された遺構

調査の結果確認した遺構は、掘立柱建物跡１棟、柱穴跡、井戸跡１基、小溝状遺構群、土坑３基である。

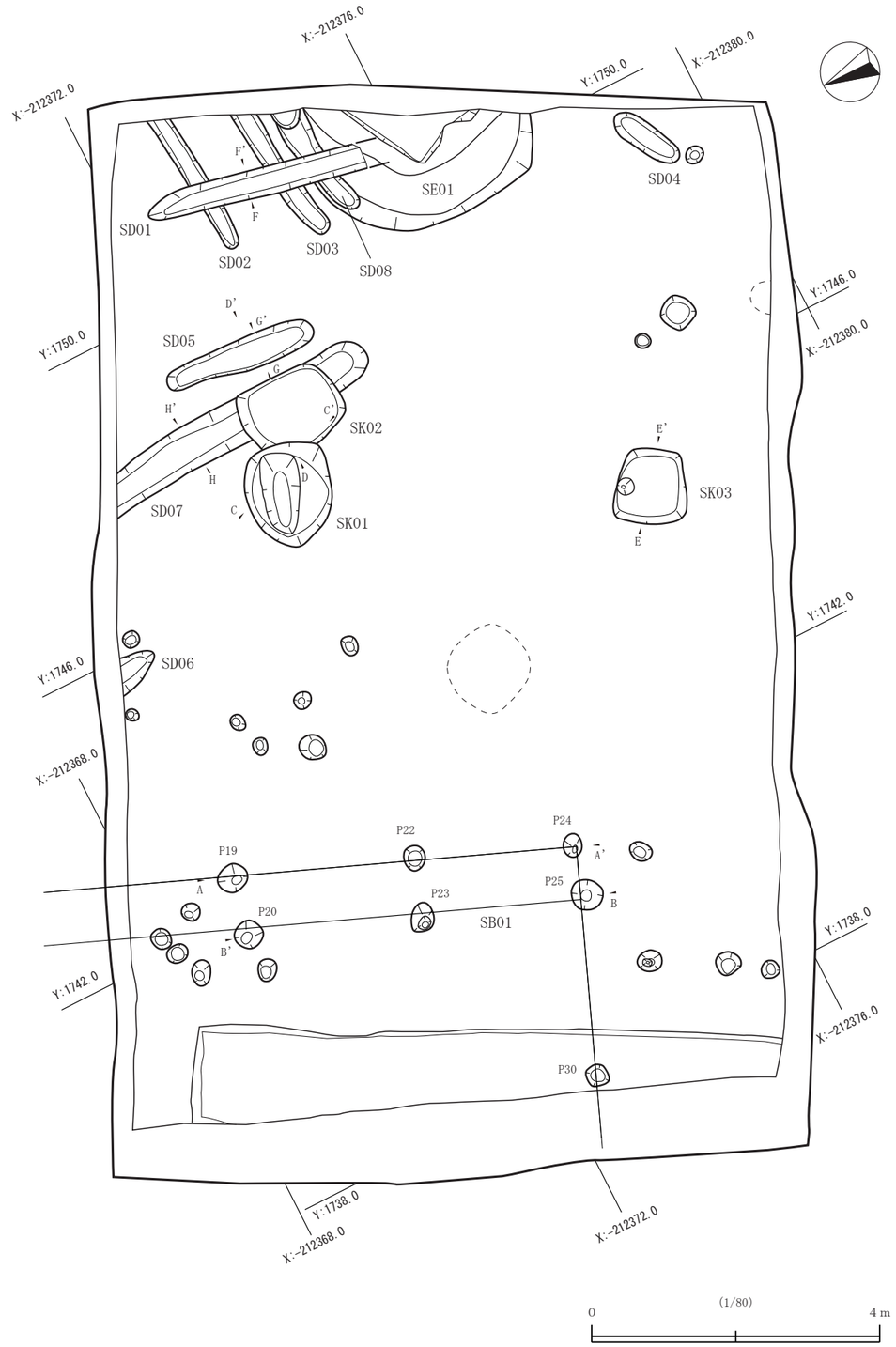
掘立柱建物跡は組み合わせの確実なもののみで、他は柱穴跡とした。出土した遺物は、土師器、須恵器である。以下に各遺構種別ごとに概略を示す。

掘立柱建物跡

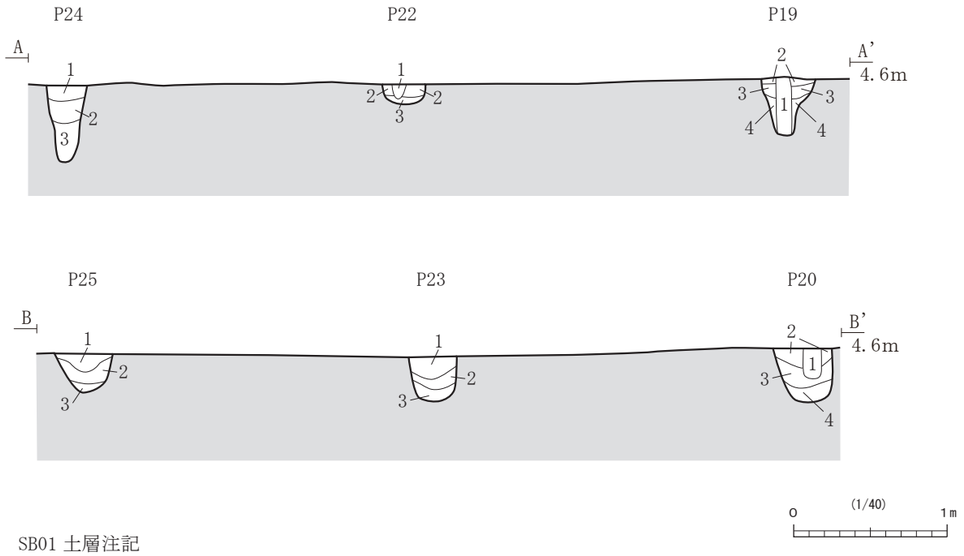
現段階で確実に組み合わせが確認され掘立柱建物跡とすることができるものは SB01 の１棟のみである。

【SB01】

調査区北西に位置する。梁行２間以上、桁行３間以上で東側に庇の付く建物と推定される。調査区内では建物の一部が確認できたのみのため、全体の規模や形状は不明である。主軸方位は側柱の柱穴列でＮ－ 22°－Ｅである。柱穴跡の平面形はいずれも不整円形で、他の遺構とは重複していない。側柱の柱穴掘方の規模は 31 ～ 38 ㎝で、庇の柱穴掘方の規模は 26 ～ 35 ㎝であり、若干ではあるが庇の柱穴掘方の規模の方が小さい。東西の柱間寸法は 2.4m、南北の柱間寸法は 2.3 ～ 2.5m である。掘立柱建物跡を構成する P19、P20、P22、P23、P24、P25、P30 で半截を実施したところ、P19、P20、P22 で柱痕跡が確認された。確認面から掘方底面までの深さは側柱の柱穴で 26 ～ 36 ㎝を測り、庇の柱穴で 14 ～ 50 ㎝を測る。遺物は、柱穴掘方埋土から若干の土師器甕と須恵器坏の小片が出土しているものの、図示できるものはなかった。他の遺構と重複しておらず、遺物も希薄であるが、周囲の遺構の年代観から SB01 の年代は９世紀代と考えたい。



第８図　原遺跡（15 地点）全体図



SB01 土層注記

	No.	土色		土質	備　考
P19	1	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	2	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	3	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを多量、にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	4	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	No.	土色		土質	備　考
P22	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物を少量、暗褐色シルト小ブロックを微量含む。
	2	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	No.	土色		土質	備　考
P24	1	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物・焼土粒を微量含む。
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを多量、炭化物を微量含む。
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	No.	土色		土質	備　考
P20	1	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	2	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。
	4	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	No.	土色		土質	備　考
P23	1	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	2	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	No.	土色		土質	備　考
P25	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。暗褐色シルト小ブロックを帯状に含む。炭化物微量含む。
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。

第９図　SB01 土層断面図

井戸跡

【SE01】

調査区東壁際に位置する。SD01、P31 と重複し、それらより古い。井戸の平面形状は方形で井戸枠をもつと推定されるが木質片は出土していない。また、井戸掘方の平面形状は遺構が調査区外に延びるため正確な形状は不明であるが、不整円形を呈するとみられる。。長軸 5.4m、短軸 2.4m 以上、断

面は箱形で確認面からの深さは 1.0m である。本調査での遺物は、井戸内の堆積土から土師器甕の小片が１点出土したのみである。確認調査で出土した土師器坏や大戸窯産の長頸瓶の年代観から９世紀前半頃と推定される。

溝跡

【SD01】

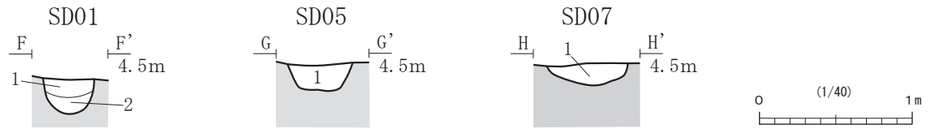
調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD02、SD03、、SD08、SE01 と重複し、それらより新しい。軸方位は N-12°　-E、確認全長 3.1m、断面深皿形で、上幅 0.3m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.2m を測る。遺物は、堆積土から土師器と須恵器の小片が少量出土し、その中から須恵器１点を第１図に図示した。第 11 図１の須恵器坏の底径は比較的小さく、底部切り離し技法は回転糸切後無調整で、器形は底部から内弯気味に立ち上がることから、村田氏編年（村田 1994）の３群土器に相当し、９世紀後半頃に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

【SD02】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD01 と重複し、それより古い。また、SD03、SD08 とほぼ平行する。軸方位は N-84°　-E、確認全長 2.0m、断面深皿形で、上幅 0.4m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.2m を測る。遺物は、堆積土から内面黒色処理の土師器小片がわずかに出土しているものの、図示できるものはなかった。重複する SD01 の年代観が９世紀後半頃と推定され、重複関係から SD02 は SD01 より古いため、SD02 の年代はおよそ９世紀前半頃と考えたい。

【SD03】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD01 と重複し、それより古い。また、SD02、SD08 とほぼ平行する。軸方位は N-82°　-E、確認全長 2.0m、断面深皿形で、上幅 0.4m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.2m を測る。遺物は、堆積土から土師器と須恵器の小片がわずかに出土してい



SD01 土層注記

No.	土色		土質	備　考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物を少量、黄褐色粘土小ブロックを微量含む。
2	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。黄褐色粘土小ブロック・酸化鉄少量、炭化物微量含む。

SD05 土層注記

No.	土色		土質	備　考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物を少量、暗褐色シルト小ブロックを微量含む。

SD07 土層注記

No.	土色		土質	備　考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを多量、炭化物をやや多く含む。

第 10 図　SD01・05・07 土層断面図

るものの、図示できるものはなかった。重複する SD01 の年代観が９世紀後半頃と推定され、重複関係からみて SD03 は SD01 より古いため、SD03 の年代はおよそ９世紀前半頃と考えたい。

【SD04】

調査区南東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、他の遺構と重複関係はない。軸方位は N-63°-E、確認全長 1.0m、断面皿形で、上幅 0.3m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.1m を測る。遺物が出土しておらず、他の遺構との重複関係もないことから、年代は不明である。

【SD05】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、他の遺構との重複関係はない。軸方位は N-５° -E、確認全長 2.1m、断面皿形で、上幅 0.4m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.2m を測る。遺物は、堆積土から土師器と須恵器が少量出土し、土師器は内面に黒色処理が施されている。その中から須恵器１点を第１図に図示した。第 11 図２の須恵器坏の底径は比較的小さく、底部切り離し技法は回転ヘラ切り離し後にナデの再調整が施されている。器形は底部から内弯気味に立ち上がり、低平であることから村田氏編年（村田 1994）の２群土器に相当し、９世紀前半頃に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

【SD06】

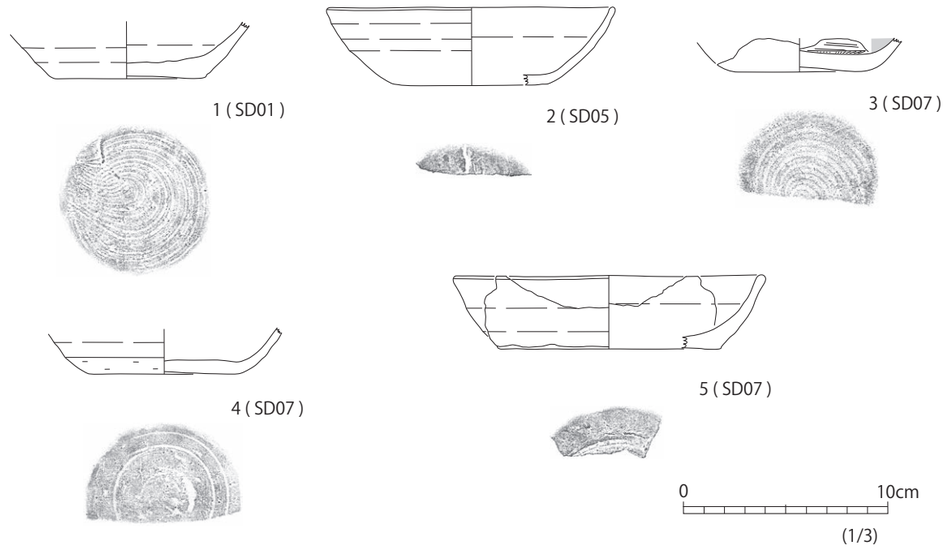
調査区中央北壁際に位置し、南東から北西に延びる溝跡で、調査区内で確認できる部分はわずかである。他の遺構との重複関係はない。軸方位は N-10° -W、確認全長 0.6m、断面深皿形で、上幅 0.5m、底幅 0.3m、確認面からの深さは 0.3m を測る。遺物は出土せず、他の遺構との重複関係もないことから、年代は不明である。

【SD07】

調査区北東に位置し、南東から北西に延びる溝跡で、SK02 と重複し、それより新しい。軸方位は N- ３° -W、確認全長 3.9m、断面皿形で、上幅 0.5m、底幅 0.3m、確認面からの深さは 0.1m を測る。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器が出土し、その中から須恵器坏２点と土師器坏１点を第１図に図示した。第 11 図３の土師器坏はロクロで製作され、底径は比較的小さい。底部切り離し技法は回転糸切後無調整である。器形は底部から内弯気味に立ち上がり、内面には黒色処理が施されている。第 11 図４の須恵器坏の底径は比較的大きく、底部切り離し技法は回転ヘラ切り離し後に回転ヘラケズリの再調整が施されている。器形は底部から内弯気味に立ち上がる。焼成不良で､外面、内面ともに赤褐色である。第 11 図５の須恵器坏の底部切り離し技法は回転糸切後に回転ヘラケズリの再調整が施されている。器形は底部から内弯気味に立ち上がり、低平である。これらの遺物の特徴から、村田氏編年（村田 1994）の２群土器に相当し、９世紀前半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

【SD08】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SE01、SD01、P31 と重複し、SE01 より新しく、SD01、P31 より古い。また、SD02、SD03 とほぼ平行する。軸方位は N-81° -E、確認全長 1.7m である。P31 に切られているため推定ではあるが、断面は深皿形、上幅 0.2 以上、底幅 0.1m 以上、確認面からの深さは 0.2m と推定され、一連の小溝状遺構群で SD02 や SD03 と同規模と考えられる。遺物は出土していないものの、重複する SE01、SD01 の年代観から、SD08 は９世紀前半より新しく、９世紀後半より古いと推定され、９世紀半ば頃と考えたい。



番号	細部・層位	種別	器種	外　　面	内　　面	残　存	法量(cm)			写真図版
							口径	底径	器高	
1	SD01・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－底部回転糸切り離し無調整	ロクロナデ	底部破片	－	7.4	－	4-1
2	SD05・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－底部回転ヘラ切り離し後ナデ	ロクロナデ	全体1/6	(14.1)	7.7	3.8	4-2
3	SD07・堆積土	土師器	坏	ロクロナデ－回転糸切り離し後ナデ	黒色処理・ヘラミガキ	底部破片	－	(6.6)	－	4-5
4	SD07・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－底部回転ヘラ切り離し後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	底部破片	－	(7.4)	－	4-4
5	SD07・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－底部回転糸切り離し後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	全体1/10	(15.3)	(10.7)	3.6	4-3

第 11 図　SD01・05・07 出土遺物

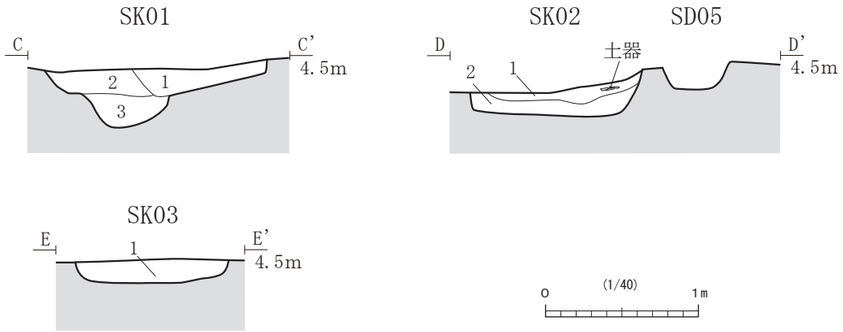
土坑

【SK01】

調査区北東側に位置し、SK02 と重複し、それより新しい。平面不整円形で東西 1.4m、南北 1.2m、断面は深皿形を呈するが、中位に段がある。確認面からの深さは 0.4m である。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器、ほかに土製品が出土し、その中から土師器の小型甕１点、須恵器長頸瓶１点、須恵器坏１点、土製品１点を第 13 図に図示した。第 13 図１の土師器の小型甕はロクロで製作され、底部切り離し技法は回転糸切後無調整である。器形は底部から直線的に立ち上がるとみられる。第 13 図２の須恵器坏の底部切り離し技法は、回転糸切後無調整で、底径は比較的小さい。器形は底部から内弯気味に立ち上がる。第 13 図３の須恵器長頸瓶は、体部下半に斜方向のヘラケズリが見られ、全体的につくりが粗雑である。第 13 図４の土製品は土鈴と推定され、手捏ね成形である。須恵器坏の特徴から、村田氏編年（村田 1994）の３群土器に相当し、９世紀後半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

【SK02】

調査区北東側に位置し、SK01、SD07 と重複し、それらより古い。平面不整方形で東西 1.0m、南北 2.0m、断面皿形で確認面からの深さは 0.2m である。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器が出土し、その中から土師器の甕２点と須恵器坏１点を第 13 図に図示した。第 13 図５・６の土師器の甕は、ロクロで製作され、長胴形の甕と推定される。このうち６の外面には平行タタキ目がみら



SK01 土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまり強い。粘性やや弱い。炭化物・焼土粒・暗褐色砂質シルトを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を少量含む。

SK02 土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。炭化物・焼土粒を多量、褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	褐色	10YR4/4	砂質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色粘土・暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。

SK03 土層注記

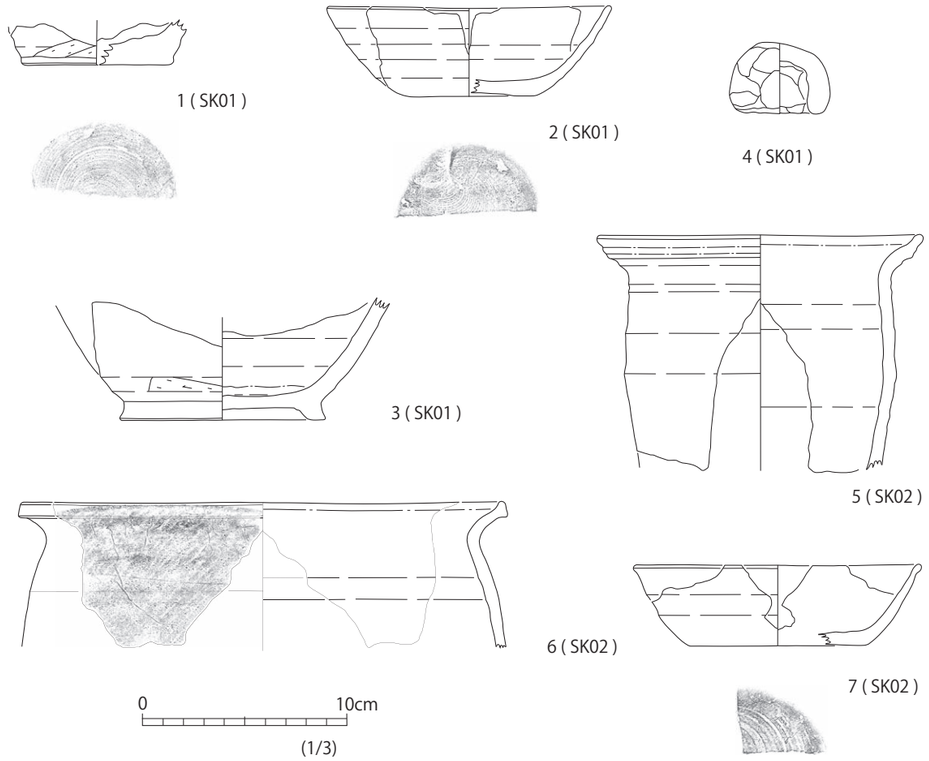
No.	土色		土質	備　　考
1	褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。にぶい黄褐色シルト・灰黄褐色粘土小ブロックを少量、炭化物・焼土粒を微量含む。

第 12 図　SK01・02・03 土層断面図

れる。第 13 図 7 の須恵器坏の底径は比較的大きく、底部切り離し技法は回転糸切り離し後に回転ヘラケズリの再調整が施されている。器形は底部から内弯気味に立ち上がり、低平である。これらの遺物の特徴から、村田氏編年（村田 1994）の２群土器に相当し、9 世紀前半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

【SK03】

調査区中央南側に位置し、他の遺構との重複はない。平面不整方形で東西 1.0m、南北 1.0m、断面皿形で確認面からの深さは 0.1m である。遺物は、堆積土から土師器と須恵器の小片がわずかに出土しているものの、図示できるものはなかった。土師器はロクロで製作され、内面が黒色処理されているものを含むことから、周囲の遺構の年代観から 9 世紀代と考えたい。遺構もその頃の年代と推定される。



番号	細部・層位	種別	器種	外　　面	内　面	残　存	法量(cm)			写真図版
							口径	底径	器高	
1	SK01・堆積土	土師器	小型甕	ロクロナデ・ヘラケズリ－底部回転糸切り離し後ヘラナデ	ロクロナデ	底部破片	－	(7.4)	－	4-9
2	SK01・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－回転糸切り離し後無調整	ロクロナデ	全体1/3	13.9	(6.2)	4.4	4-6
3	SK01・堆積土	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ－ヘラケズリ	ロクロナデ	底部破片	－	(10.0)	－	4-8
4	SK01・堆積土	土製品	土鈴？	手捏ね成形、幅4.9cm、高さ3.5cm。		全体1/2	－	－	－	4-12
5	SK02・堆積土	土師器	小型甕	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部破片	(15.9)	－	－	4-10
6	SK02・堆積土	土師器	大型甕	ロクロナデ・平行叩き目	ロクロナデ	口縁部破片	(23.2)	－	－	4-11
7	SK02・堆積土	須恵器	坏	ロクロナデ－回転糸切り離し後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	全体1/6	(14.1)	(8.6)	3.9	4-7

第 13 図　SK01・02 出土遺物

３．まとめ

原遺跡第 15 地点の調査では、６月 10 日から 20 日まで行われた確認調査と、７月 31 日から９月６日まで行われた記録保存調査によって、９世紀代につくられた東側に庇の付く掘立柱建物跡１棟と井戸跡１基、溝跡８条、土坑３基、柱穴跡が確認された。遺跡内でのこれまでの調査成果は、JR 常磐線の西側（以下、「線路東側」「線路西側」と表記）では第３次調査で発見された大型掘立柱建物跡を含む多くの掘立柱建物跡や竪穴建物跡などの遺構、及び遺物が発見されていたが、その東側の状況については調査実績が少なく、詳細は不明であった。しかし、令和元年度に線路の東側で実施された第４次調査や第 12 地点の調査によって、新たな知見を得ることができた。

原遺跡第４次調査は第 15 地点の 200m ほど南の地点で実施され、２時期の遺構面の存在が認められた。１面は９世紀前半以降に機能していたと考えられ、一辺が 1.0m 弱の方形の柱穴で構成される掘立柱建物跡３棟、溝跡３条、小溝状遺構群が確認されている。２面は８世紀代に機能していたと考えられ、一辺が 1.0m 弱の方形の柱穴で構成される掘立柱建物跡４棟、竪穴建物跡 12 棟、柱穴跡、土坑、溝跡が確認されている。第３次調査地点の北東に近接する位置で同時期の掘立柱建物跡が見つかったことで、線路東側にも遺構が広がることが判明した。中でも線路西側で掘立柱建物がみられなくなる９世紀代の掘立柱建物が確認されたことは、９世紀代に官衙的な遺構の中枢が線路東側の地区に移動している可能性を示すものとなった（岩沼市教委 2020a）。

原遺跡第 12 地点の調査は、第 15 地点と第４次調査地点のほぼ中間の位置で実施され、７世紀末から９世紀前半頃につくられた竪穴建物跡８棟と大溝跡１条、溝跡 12 条、土坑６基、柱穴跡が確認されている。大溝は９世紀代まで機能し、10 世紀前半頃に埋没した可能性があり、その外側（北側や東側）では遺構や遺物が極端に減少することが指摘されている（岩沼市教委 2020b）。

これら線路東側地区の調査成果の要点を整理すると、①第３次調査地に近接する第４次調査地では、線路西側では確認されていない９世紀以降の掘立柱建物の存在を確認、②第４次調査地、及び第 12 地点では、７世紀末から９世紀前半頃までの竪穴建物の存在を確認、③第 12 地点では７世紀後半から９世紀代まで機能した大溝が存在し、その外側（北側・東側）では生活の痕跡が希薄になることを確認、などの点が遺跡全体を俯瞰する際の重要な要素となる。

今回の調査で発見された遺構は、いずれも９世紀代に位置付けられるものである。一定間隔で平行に並ぶ溝跡は畑の畝跡と考えられ、畑地の傍らには庇の付いた掘立柱建物が同時期に存在していた可能性がある。また井戸には構築部材が残されていなかったが、掘方の形状から当該期の一般集落ではほぼみられない井戸枠を伴っていたことが推定されるものである。このように、前述の第 12 地点で確認された大溝外側においても遺構・遺物が確認できたことは、駅家・剗などの官衙的な施設に近接した箇所での人々の営みの様子を知る手掛かりとなるものである。今後も本調査地周辺で調査を継続する中で、官衙的な施設に従事した人々の居住域や生産域を解明していくことが、施設の中枢域の把握とともに重要な課題となる。

原遺跡 15 地点調査区遠景（北から）

原遺跡 15 地点調査区全景（真上から）

写真図版２

原遺跡 15 地点調査区全景（西から）

SB01 掘立柱建物跡（南東から）

SB01 掘立柱建物跡（南から）

P19 南北セクション（東から）

P20 南北セクション（東から）

写真図版３

SE01 井戸跡完掘状況（西から）

SD01・02・03 完掘状況（東から）

SK01・02・SD05・07 完掘状況（北から）

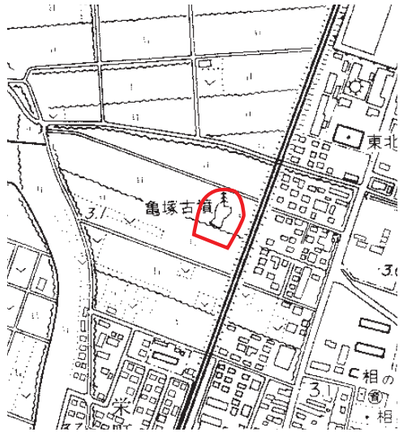
SK01・02・SD05・07 完掘状況（南から）

SK03 完掘状況（南から）

写真図版４

２．かめ塚古墳（第２次調査）

Ａ．調査に至る経緯と調査方法



第 14 図　かめ塚古墳位置図（1/10,000）

令和２年６月４日付けで県史跡かめ塚古墳、及びかめ塚西遺跡全域を含む地域での宅地造成計画に関する協議書が提出された。事業対象地内に県史跡を含むことから、７月７日に県教育委員会文化財課、開発事業者、市教育委員会生涯学習課の３者による現地協議が行われた。現地協議の結果、かめ塚古墳の墳丘には盛土貼付も含めて一切手を加えないこと、そして現在地表に顕在する墳丘は後世の耕地整理などによって大きく改変されていることが市史編纂事業に伴う第１次調査で明らかになったことから、旧墳丘の規模、周濠の範囲の把握が必要になるとの指導があった。事業者側から示された事業計画では、かめ塚古墳を含めた一帯は公園として整備することが盛り込まれていたが、より詳細な事業計画を策定する上では早急に保存する範囲を把握する必要があることから、かめ塚西遺跡の調査と同様に２か年に渡って調査を実施することとした。

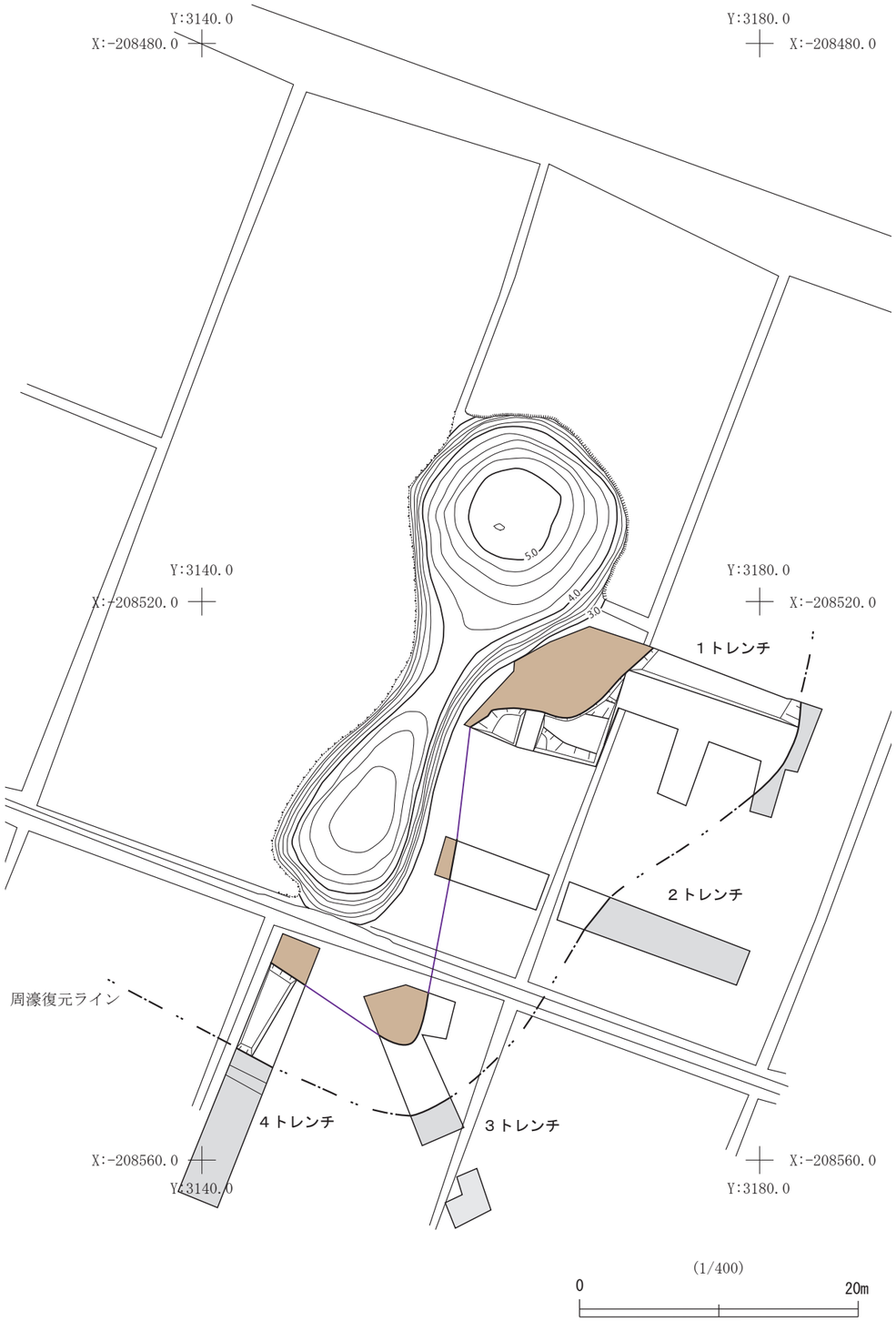
令和２年度の調査は 12 月１日から開始した。今年度は事前に地権者から了解を頂いた地点で実施しているため、古墳の東部から南部にかけての範囲とした。調査は墳丘から放射状に幅３～５ｍ、長さ 20 ｍトレンチを４箇所設定した後、重機を用いて水田耕作土の掘削をした。その後、人力によってにぶい黄褐色粘質シルトの上面で遺構精査を行い、周濠ラインの確認に努め、１トレンチと４トレンチでは周濠の一部で底面までの掘り下げを行った。また平面図や断面図作成、写真撮影などを随時実施した。調査が完了した１月 24 日以降に埋め戻し作業に入り、２月 10 日に完了した。

Ｂ．調査の概要

令和２年度のかめ塚古墳の調査目的は、保存範囲を策定するために必要な本来の墳丘形状･規模と、周濠の形状・規模の把握である。なお、平成 24 年度に市史編纂事業に伴って実施した調査では、後円部南東部より付帯施設が東へ延びることが確認されていることから、今回１トレンチに含めて再調査を実施している。以下に各トレンチの概要を記す。

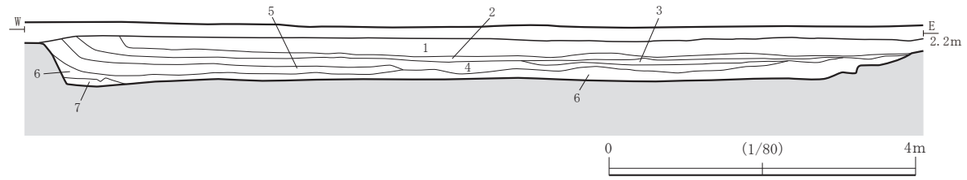
１トレンチ

１トレンチは東側くびれ部から後円部南側にトレンチを設定した。調査は 12 月１日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 40 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 30 ㎝で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。調査範囲のほぼ全域では後世の耕地整理の際に掘削を受けており、盛土はごく僅かに遺存するのみであったが、地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認でき、これにより本来の後円部端部は、現在の墳丘裾から 5.60 ｍ東側に位置することが明らかとなった。同様にくびれ部付近についても現在の墳丘裾から 1.52 ｍ東側に位置することが明らかとなった。確認された後円部の形状は、



第 15 図　かめ塚古墳全体図

かめ塚古墳１トレンチ周濠セクション



かめ塚古墳１トレンチ周濠セクション土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	粘性ややあり。しまりややあり。酸化鉄を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘土	粘性あり。しまり強い。黄褐色粘土小ブロックを微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	粘性ややあり。しまり強い。黒褐色粘土小ブロックを多量、酸化鉄を微量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	粘性ややあり。しまり強い。酸化鉄を多量、黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	粘土	粘性強い。しまり強い。酸化鉄・灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色	10YR3/2	粘土	粘性強い。しまり強い。酸化鉄を多量、灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
7	灰黄褐色	10YR4/2	シルト粘土	酸化鉄を多量、黒褐色粘土小ブロックをやや多く含む。

第 16 図　１トレンチ周濠土層断面図

正円形の軌道とはならず、南東隅部がやや角張るような形態となるが、この箇所には東側に造り出しとみられる施設を設置していることが関係している可能性がある。

この造り出しとみられる施設は第１次調査の際に確認されたもので、当初は渡り土手の可能性を考慮したが、今回の調査で延長線上に設定した拡張区では明瞭に認められなかったことから、ここでは造り出しの可能性が高いものとして理解しておく。この施設は調査によって確認した墳丘の上端からは 20 ㎝下に位置し、墳丘と同様に地山を削り出してつくられている。上幅は 2.42 ～ 1.04 m、基底部幅は 4.50 mで、緩やかに傾斜して周濠底面へと至る。なお、周濠底面からの高さは北側では 30 ㎝、南側では 40 ㎝を測る。これまでに確認した長さは 5.04 mであるが、さらに東側へ広がるために全長は不明である。

周濠はトレンチ北壁で計測すると、上幅 11.24 m、下幅 9.76 mを測る。確認した周濠の平面形態は、後円部の形状に沿うような弧状を呈する。周濠外縁ラインを確認するために設定したサブトレンチでは、地山であるにぶい黄褐色粘質シルトが南側へ緩やかに傾斜していることが確認された。周濠底面の墳端から墳丘斜面の傾斜角度は 66°とやや急傾斜であるが、周濠外縁にかけての傾斜角度は 17°と緩やかとなっている。周濠底面は海抜 1.56 mでほぼ平坦であるが、墳端付近では若干低くなる。また、第１次調査で一木二又鋤が底面より出土しているくびれ部付近の周濠底面海抜は 1.52 m前後である。周濠堆積土は黒色粘質土を主体とする自然堆積であり、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられる。

遺物は周濠堆積土上面の精査時に須恵器甕が出土している。また掘削及び精査時に須恵器坏、在地産の近世陶器瓶、砥石が出土している。

２トレンチ

２トレンチは前方部中央付近の東側にトレンチを設定した。調査は 12 月２日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 40 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 50 ㎝で確認したにぶい黄褐色粘土上面で遺構精査を実施した。調査範囲のほぼ全域で後世の耕地整理の際に削平されており、盛土は認められなかったが、現在の墳丘裾から 2.20 m東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。周濠外縁はこの墳丘

基底部から 11.42 m東側で確認されている。周濠外縁ラインは北北東－南南西にかけて走り、前方部東側の墳丘線との間が徐々に狭まっていく様相がみられる。本トレンチは周濠範囲の把握を目的とするため、周濠内の掘り下げは行っていないが、堆積土は黒色粘質土を主体とし、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられることを確認している。なお、周濠東側では１トレンチから続く地山面の南側への傾斜により、水田耕作土下で暗褐色粘質シルトがやや厚く堆積することが確認された。遺物は出土していない。

３トレンチ

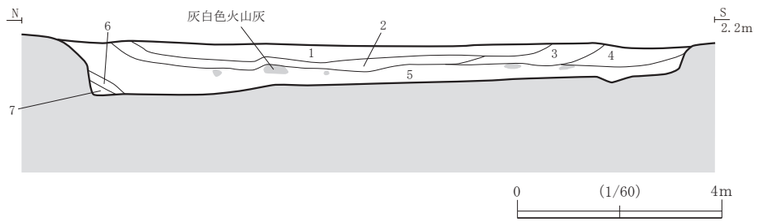
３トレンチは前方部南東角の位置を把握することを目的としてトレンチを設定した。調査は 12 月５日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 20 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 30 ㎝で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。調査範囲のほぼ全域で後世の耕地整理の際に削平を受けており、盛土は認められなかったが、現在の墳丘裾から 9.20 m東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。周濠外縁はこの墳丘基底部から 4.94 m東側で確認されている。周濠外縁ラインは北東－南西にかけて走り、これまで確認した中では墳丘線と周濠外縁が最も狭くなっている。本トレンチは周濠内の掘り下げは行っていないが、他のトレンチと同様に堆積土は黒色粘質土を主体とし、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられることを確認している。遺物は周濠堆積土層から頸部に波状文が施された須恵器大甕が出土している。

４トレンチ

４トレンチは前方部南側にトレンチを設定した。調査は 12 月５日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 20 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 30 ㎝で確認した明黄褐色粘土上面で遺構精査を実施した。調査範囲のほぼ全域で後世の耕地整理の際に削平を受けており、盛土は認められなかったが、現在の墳丘裾から 5.02 m東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。

周濠外縁はこの墳丘基底部から 6.64 m南側で確認されている。周濠外縁ラインは南東－北西に

かめ塚古墳４トレンチ周濠セクション



かめ塚古墳４トレンチ周濠セクション土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	粘性やや弱い。しまりやや弱い。酸化鉄を少量含む。古代遺物を混入する。
2	黒色	10YR2/1	粘土	粘性強い。しまり強い。厚さ８㎜ほどのにぶい黄褐色粘土と互層堆積。
3	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	粘性やや強い。しまりやや弱い。黒褐色粘土小ブロックを多量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	粘性やや強い。しまりやや弱い。酸化鉄を多量含む。
5	黒褐色	10YR2/2	粘土	粘性極めて強い。しまりやや弱い。上面付近に灰白色火山灰ブロックを含む。酸化鉄散見。
6	黒褐色	10YR2/2	粘土	粘性やや強い。しまり弱い。地山ブロックを多量含む。
7	灰白色	5Y8/1	粘土	粘性やや強い。しまりやや弱い。黒褐色粘土中ブロックを少量含む。

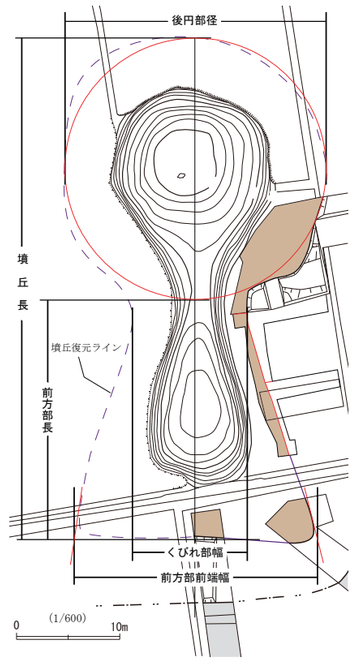
第 17 図　４トレンチ周濠土層断面図

かけて走り、墳丘線と並行している。周濠内に設定したサブトレンチでは、周濠底面の墳端から墳丘斜面の傾斜は 84°の角度で立ち上がるが、中程からやや緩やかになる。周濠外縁にかけての傾斜は、60°とやや急傾斜である。周濠底面は外縁底面から墳端へかけて傾斜しており、墳端での海抜は 1.52 mとなる。周濠堆積土は黒色粘質土を主体とする自然堆積であり、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられる。その直上の黒色粘土層内では白色粘土の薄層がラミナ状を呈する。なお、周濠外側には周濠に沿うように上幅 80 ㎝の東西溝が存在しているが、部分的な確認のため古墳に伴う施設であるかは不明である。

遺物は周濠内より非ロクロ成形の土師器甕が出土している。また周濠部精査時に非ロクロ成形の土師器坏、頸部に波状文が施された須恵器大甕が出土している。

Ｃ．小結

平成 24 年度に実施した市史編纂事業に伴う調査では、発掘調査によって墳丘基底部や周濠の存在を確認したことを受けて、墳丘裾から放射状にラインを設定してボーリング調査を実施し、本来の墳形や周濠範囲の把握を試みた。現在目にすることができるかめ塚古墳の形状は柄鏡形の前方後円墳と表現されるが、ボーリング調査の結果では前方部前端が大きく開く、いわゆる「撥形」を呈することが考えられた。今回の調査ではこの前方部前端の形状が、ボーリング調査の成果と合致するのかという点も大きな目的であったが、結果としてはほぼ想定通りの墳丘形状であることが確認された。以下に現時点で想定しうる墳丘規模の暫定値を示す。なお、相似する古墳の有無などについては全体の様相が判明した上で検討していきたい。



第 18 図　かめ塚古墳の暫定値計測位置図

第 18 図は本来の墳丘の平面形状と暫定値を測定した箇所を示したものである。復元した墳丘主軸長は 48.5 mとなる。ボーリングという調査の制約から後円部は正円形を描けるものではないが、後円部径は 26.1 mを測る。一方で前方部長は 22.4 mとなり、主軸長に対する前方部・後円部の占める割合は前方部 46.2% に対し、後円部 53.8% となる。前方部の前端幅は 23.3 m、くびれ部幅 11.2 mを測る。立面形態は後円部高さは 2.6 m（海抜 5.3 m）、前方部高さ 2.0 m（海抜 4.7 m）であり、後円部からくびれ部へ下り、わずかに前方部へと上る。古墳を築造する際に用いた尺度については、古墳時代前期の尺度が１尺 23.1 ㎝が基準として用いられている事例が多いことがこれまでに甘粕健氏によって明らかにされており、これを用いてみると墳丘主軸長は約 210 尺、後円部径は約 113 尺、前方部長は約 97 尺、前方部前端は約 100 尺、くびれ部は約 46 尺となる。しかしながら、奇数尺は基本的に左右対象となることが求められる後円部の設計で用いることが難しいと考えられることから、後円部径を 112 尺としたと仮定すると、１尺は 23.3 ㎝となり、前方部長は約 96 尺、前方部前端は 100 尺、くびれ部は約 48 尺となる。以上のことからかめ塚古墳では、１尺 23.3 ㎝の規格によって築造された可能性が高いと思われる。

写真図版１

かめ塚古墳空中写真（上空から）

写真図版２

かめ塚古墳全景（南東上空から）

かめ塚古墳１トレンチ・周濠断面（南東から）

かめ塚古墳２トレンチ全景（東から）

かめ塚古墳３トレンチ・前方部角（南から）

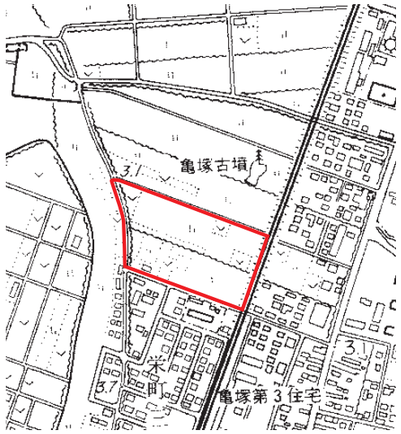
かめ塚古墳４トレンチ全景（南から）

３．かめ塚西遺跡（第１次調査）

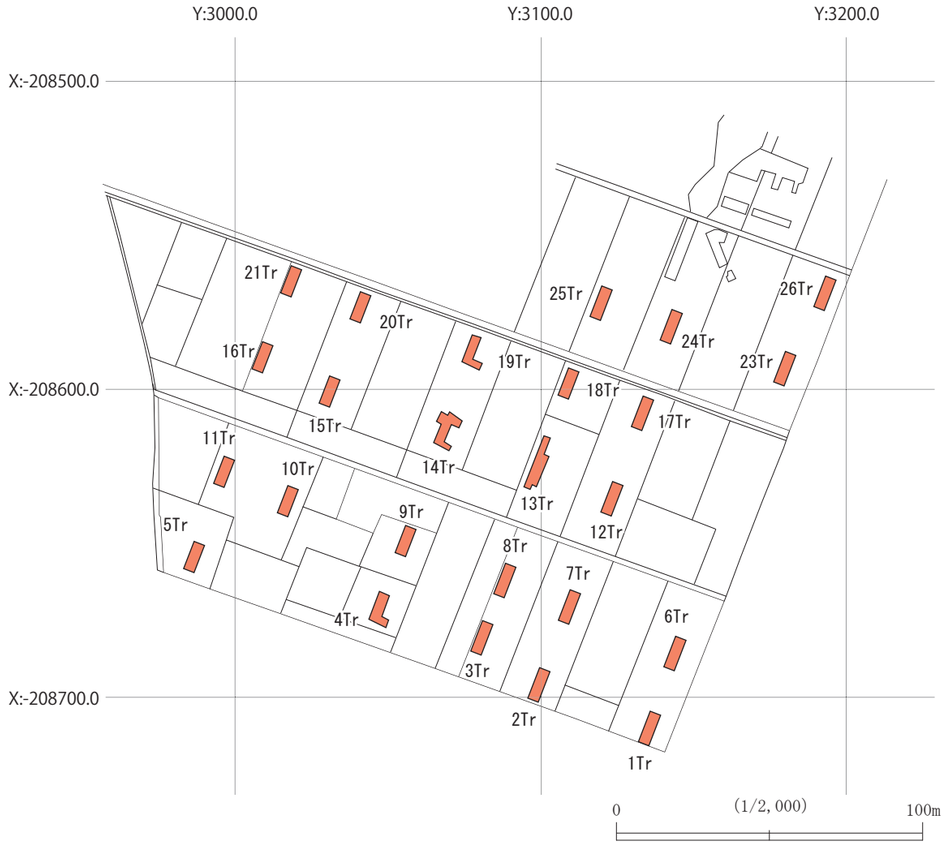
Ａ．調査に至る経緯と調査方法

対象地はかめ塚西遺跡に位置する。遺跡内では遺物の採取は行われているが、発掘調査は実施されておらず、今回が第１次調査となる。

令和２年６月４日付けで県史跡かめ塚古墳、及びかめ塚西遺跡全域を含む地域での宅地造成計画に関する協議書が提出された。事業対象地内に県史跡を含むこと、また対象地内に周知の埋蔵文化財の全域が含まれることから、７月７日に県教育委員会文化財課、開発事業者、市教育委員会生涯学習課の３者による現地協議が行われた。現地協議の結果、かめ塚西遺跡においては本調査が必要となる範囲等を把握することを目的とし、恒久的な構造物となる道路部分、及び調整池予定地で遺構・遺物の有無を確認するため



第 19 図　かめ塚西遺跡位置図（1/10,000）



第 20 図　かめ塚西遺跡トレンチ配置図

の確認調査を実施することになった。しかしながら、対象地では米作などの作付が行われており、収穫後に単年で 63ha にも及ぶ範囲の確認調査を実施することは極めて困難であることから、２か年に渡って調査を実施することとした。

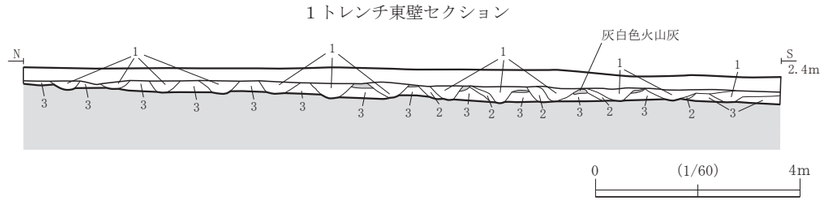
令和２年度の調査は 11 月 18 日から開始した。今年度は道路敷設予定範囲内に東西３m、南北 10m のトレンチを 26 箇所設定し、重機を用いて水田・畑作耕作土の掘削をした。その後、人力によって褐色粘土、あるいはにぶい黄褐色粘質シルトの上面で遺構精査を行い、平面図や断面図、写真撮影などを随時実施した。調査が完了した１月 24 日以降に埋め戻し作業に入り、２月 10 日に完了した。

Ｂ．調査の概要

令和２年度のかめ塚西遺跡の確認調査について、以下に各トレンチでの概要を記す。

１トレンチ

１トレンチの調査は 11 月 26 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 30 ㎝下で確認されたにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西方向に広がる小溝状遺構群であるが、壁面観察では耕作時に火山灰の降下があり、直後に畝に土をかぶせている様子がみられる。遺物は出土していない。



１トレンチ東壁セクション土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	粘性やや強い。しまりやや強い。暗褐色・灰黄褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	粘性弱い。しまりやや弱い。酸化鉄をやや多く含む。灰白色火山灰を覆う。
3	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	粘性やや弱い。しまりやや弱い。地山を粒状に少量含む。

第 21 図　１トレンチ東壁土層断面図

２トレンチ

２トレンチでの調査は 11 月 27 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色粘質シルトを覆土とする小ピット２口である。遺物は精査時に須恵器甕が出土している。

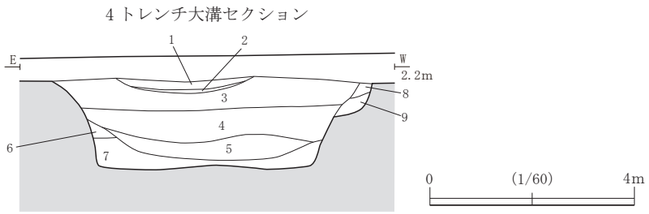
３トレンチ

３トレンチでの調査は 11 月 27 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 25 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色シルトを覆土とする東西方向の溝跡である。覆土中にはブロック状に灰白色火山灰を含んでいた。遺物は精査時に非ロクロ成形の土師器甕、ロクロ成形の土師器甕が出土している。

４トレンチ

４トレンチでの調査は 11 月 28 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 25 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色粘質シルトを覆土とする南北方向の大溝跡、土坑、小ピットである。このうち、大溝跡は上幅 3.10 m、

下幅 2.06 m、深さ 82 ㎝を測る。覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は大溝の上層から非ロクロ成形の土師器甕と手づくね土器、下層から非ロクロ成形の土師器甕が出土している。また精査時には非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕が出土している。



４トレンチ大溝セクション土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	黒色	10YR2/1	粘土	粘性強い。しまりやや強い。
2	灰白色	10YR8/1	火山灰	十和田起源の火山灰
3	黒褐色	10YR3/2	粘土	粘性強い。しまり強い。酸化鉄を多量、灰黄褐色・黒褐色粘土小ブロックを微量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまり・粘性強い。酸化鉄・灰黄褐色粘土小ブロック・炭化物を微量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	粘土	しまりやや強い。粘性強い。灰黄褐色・黒褐色・オリーブ灰色粘土小ブロックを微量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	粘土	しまりやや強い。粘性強い。酸化鉄を多量、灰黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
7	褐灰色	10YR4/1	粘土	しまりやや強い。粘性強い。オリーブ灰色粘土小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR3/1	粘土	しまり・粘性強い。灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く、酸化鉄を少量含む。
9	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまり・粘性強い。酸化鉄を多量含む。

第 22 図　４トレンチ土層断面図

５トレンチ

５トレンチでの調査は 12 月１日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はいずれも黒褐色粘質シルトを覆土とするピット３口である。これらの覆土には褐色粘土小ブロックが少量含まれている。遺物は精査時に非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕が出土している。

６トレンチ

６トレンチでの調査は 11 月 26 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 30 ㎝下で確認した灰黄褐色砂質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色シルトを覆土とする土坑１基である。遺物は出土していない。

７トレンチ

７トレンチでの調査は 11 月 27 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 50 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色粘質シルトを覆土とする大溝である。大溝は南東―北西方向に延びるもので、覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は出土していない。

８トレンチ

８トレンチでの調査は 11 月 27 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。ここでは遺構は確認されず、また遺物も出土していない。

９トレンチ

９トレンチでの調査は 11 月 28 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はすべて黒色粘質シルト黒褐色粘質シルトを覆土とする大溝と土坑である。また、中央より南側では明治期にこの地区一帯で瓦を生産していた時の粘土採掘坑と考えられる大規模な攪乱が存在する。大溝跡は前述の４トレンチ、及び後述する 14・19 トレンチで確認されたものと同一遺構の可能性がある。覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は掘削、及び精査時に非ロクロ成形の土師器坏・甕、大堀相馬焼の碗が出土している。

10 トレンチ

10 トレンチでの調査は 11 月 28 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はすべて黒褐色シルトを覆土とする溝跡、土坑である。これらの遺構では、検出時において灰白色火山灰はみられない。遺物は掘削、及び精査時に非ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕、瀬戸美濃産染付碗が出土している。

11 トレンチ

11 トレンチでの調査は 12 月１日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 25 ㎝下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色シルトを覆土とするピット２口である。これらの遺構では、検出時において灰白色火山灰はみられない。遺物は掘削、及び精査時に非ロクロ成形の土師器甕が出土している。

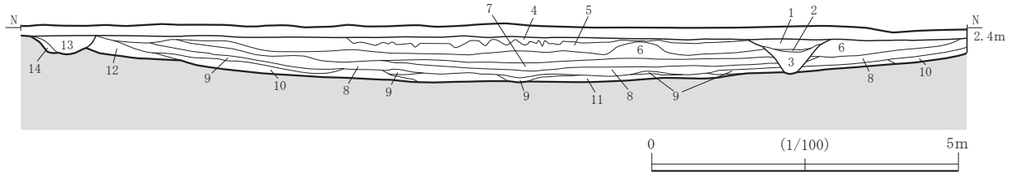
12 トレンチ

12 トレンチでの調査は 11 月 19 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は土坑２基であり、うち１基は黒色粘質シルトを覆土とし、灰白色火山灰を粒状に含むものである。もう１基の覆土は暗褐色シルトで耕作土が混入する。遺物は出土していない。

13 トレンチ

13 トレンチでの調査は 11 月 26 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した黒褐色・暗褐色シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は自然流路とみられる大溝と、これより新しい溝跡２条である。大溝はレンズ状に堆積するとみられ、覆土上層には灰白色火山灰が南東―北西にかけて広がる。確認した範囲での幅は約 13 m、深さは 80 ㎝下で確認した灰白色粘土層まで掘り下げている。最下部には灰色微粒砂と黒色粘土が互層状に堆積する。この大溝は走方向から７トレンチで確認した大溝と同一遺構の可能性が高いが、これ以外のトレンチでは見られず、トレンチ間を蛇行している可能性がある。なお、この大溝より新しい東西溝では、上層に灰白色火山灰が最大８㎝の厚みをもって堆積する。遺物は溝内の堆積土中から非ロクロ成形の土師器甕、須恵器坏が出土している。

13 トレンチ西壁セクション



13 トレンチ西壁セクション土層注記

No.	土色		土質	備　考
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。酸化鉄を微量含む。
2	灰白色	5Y8/1	火山灰	十和田起源の火山灰。黒褐色粘土粒を少量含む。厚さは６㎝。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。灰黄褐色粘土中ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。古代以降の水田耕作土か。灰白色火山灰ブロックを含む。
5	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。灰白色火山灰をブロック状に少量含む。
6	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。均質な土層。下位に酸化鉄を集積する。
7	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強く、粘性やや強い。酸化鉄を多量含む。
8	灰色	5Y6/1	粘土	しまり・粘性とも極めて強い。黒褐色粘土をごく微量含む。
9	黒色	10YR2/1	粘土	しまりやや弱く、粘性強い。灰白色粘土薄層を部分的に含む。
10	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色粘土小ブロックを少量含む。酸化鉄を散見。
11	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性強い。黒褐色粘土中ブロックをやや多く含む。中心付近では褐色粗砂の薄層を互層状に含む。
12	黒色	10YR2/1	粘質シルト	しまり・粘性強い。灰白色粘土小ブロックを微量含む。
13	黒色	10YR2/1	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
14	黒色	10YR2/1	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性強い。にぶい黄褐色シルトを粒状に微量含む。

第 23 図　13 トレンチ西壁土層断面図

13 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　面	内　面	残存	法量（cm）			写真番号
							口径	底径	器高	
1	13Tr・SD	須恵器	坏	ロクロナデ・底部回転糸切未調整	ロクロナデ	1/6	－	6.0	(3.1)	4-1

第 24 図　13 トレンチ出土遺物

14 トレンチ

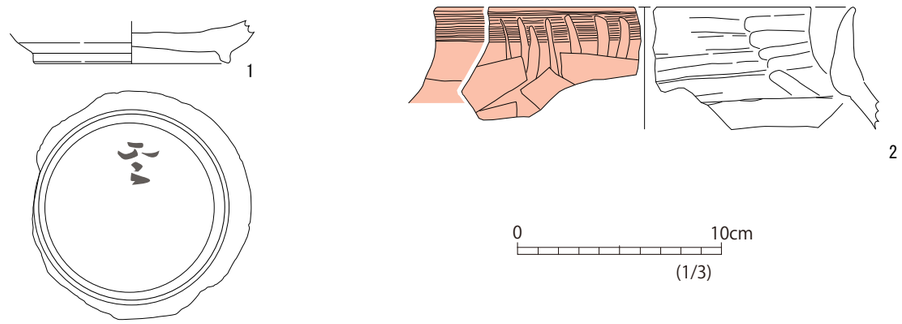
14 トレンチでの調査は 11 月 19 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に延びる大溝、そして大溝東側で並行して走る溝跡である。確認した大溝は幅 3.0 ～ 3.5m で、黒色粘質シルトを覆土とする。確認面ではレンズ状に堆積するとみられる灰白色火山灰が大溝覆土の東西でみられる。遺物は大溝上面の精査時に非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。

15 トレンチ

15 トレンチでの調査は 11 月 24 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西方向に走る溝跡、土坑、ピットである。東西溝の上面には灰白色火山灰が堆積する。またピットでも覆土内に灰白色火山灰を小ブロック状に含むものがある。遺物は掘削、及び精査時に非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。

16 トレンチ

16 トレンチでの調査は 11 月 24 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は柱穴、土坑、小ピット多数である。このうち、一辺が 80 ～ 100 ㎝で長方形を呈するとみられる柱穴が２基あり、そこでは径 15 ㎝ほどの柱痕跡がみられる。遺物は土坑内からは非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器坏、ピット内からは須恵器高台坏や赤彩が施された土師器甕が出土している。また掘削、及び精査時には非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、青磁瓶、志野焼皿、小野相馬産碗が出土している。



16 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　面	内　面	残存	法量（cm）			写真番号
							口径	底径	器高	
1	16Tr・P06	須恵器	高台坏	ヘラギリ→回転ヘラケズリ、 高台貼付・ロクロナデ、底部に墨書	ロクロナデ	底部 完存	－	9.8	(2.1)	4-3
2	16Tr・P11	土師器	甕	ヨコナデ→ミガキ→ヘラケズリ 外面は赤彩	ミガキ・ナデ	1/6	20.6	－	(6.0)	4-2

第 25 図　16 トレンチ出土遺物

17 トレンチ

17 トレンチでの調査は 11 月 19 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 20 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西溝がある。この東西溝の上幅は約 1.3 m、深さは約 20 ㎝で、覆土は黒褐色粘質シルトであり、上層に灰白色火山灰が堆積する。遺物は溝内に堆積する灰白色火山灰下より須恵器瓶が出土している。また掘削、及び精査時には瀬戸美濃産染付小坏が出土している。

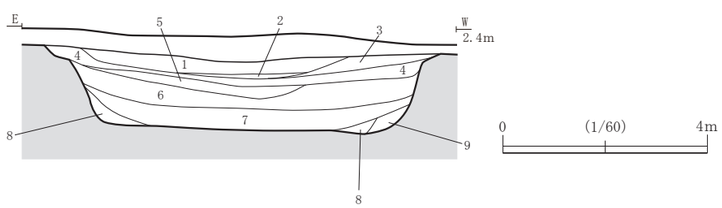
18 トレンチ

18 トレンチでの調査は 11 月 25 日から開始した。重機で耕作土の掘削を行った後、現地表面から 70 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は土坑、ピットがある。遺物は掘削時に盛土中より非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器蓋・甕、大堀相馬産の碗、小野相馬産の碗、在地産の近世陶器瓶が出土している。なお、本トレンチでは周辺の水田面より遺構確認面である褐色粘質シルトが高い標高で確認されたことから、昭和 20 ～ 30 年代に行われた耕地整理によって水田面では大きく削平を受けていたことが判明した。

19 トレンチ

19 トレンチでの調査は 11 月 20 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 70 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に走る大溝跡、溝跡、ピットであり、遺構の覆土はすべて黒色粘質シルトである。大溝跡の覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。大溝は幅 3.5 ｍ、深さ１ｍであり、断面形状は箱状を呈する。南側の４・９・14 トレンチから直線状に延びるものと考えられ、さらに北側へ展開する。なお、大溝の東側に並行して走る溝跡を確認しているが、こちらも 14 トレンチから延びるものと思われる。遺物は大溝の精査時に非ロクロ成形の土師器甕、ロクロ成形の土師器甕、須恵器甕・瓶、砥石が出土している。また覆土中からは非ロクロ成形の土師器甕、須恵器坏・甕、不明土製品が出土している。

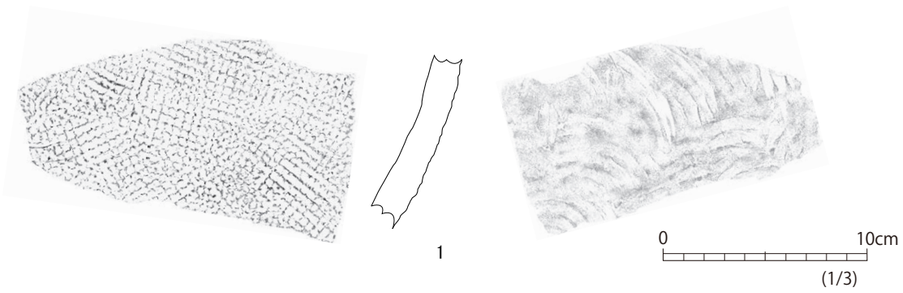
19 トレンチ大溝セクション



19 トレンチ大溝セクション土層注記

No.	土色		土質	備　　考
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。古代遺物を含む。
2	灰白色	5Y8/1	火山灰	十和田起源の火山灰。黒色粘土粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。酸化鉄を層全体に少量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。酸化鉄を層全体にやや多く含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり弱く、粘性やや弱い。黒褐色粘土小ブロックを少量含む。
6	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり・粘性強い。酸化鉄を層全体に多量含む。
7	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	しまり強く、粘性極めて強い。明灰黄色粘土小ブロックを少量含む。
8	黒褐色	10YR2/2	粘土	しまり・粘性強い。明灰黄色粘土中ブロックをやや多く含む。
9	褐灰色	10YR4/1	粘土	しまり・粘性やや強い。黒褐色粘土中ブロックをやや多く含む。

第 26 図　19 トレンチ土層断面図



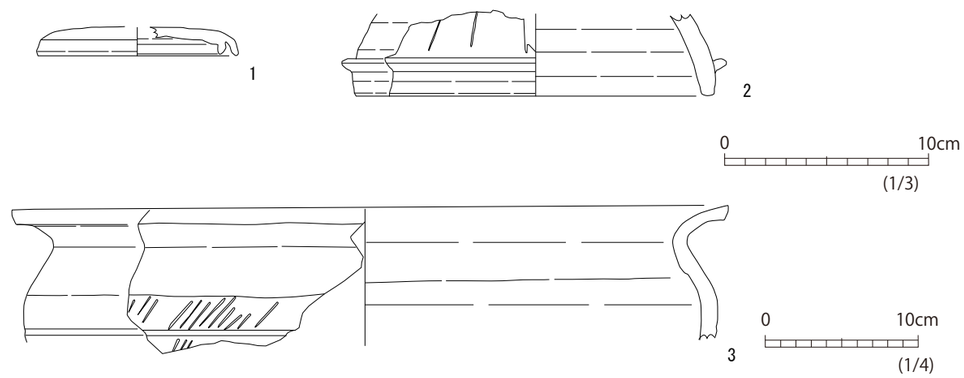
19 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　　面	内　　面	残存	法量（cm）			写真番号
							口径	底径	器高	
1	19Tr・大溝	須恵器	甕	格子目タタキ	同心円状の当具痕	－	－	－	－	4-7

第 27 図　19 トレンチ出土遺物

20 トレンチ

20 トレンチでの調査は 11 月 25 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 70 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に走る溝跡、土坑であり、遺構の覆土はすべて黒色粘質シルトであるが、検出時には灰白色火山灰はみられない。遺物は土坑内からは非ロクロ成形の土師器甕のほか、東海地方で生産された可能性がある須恵器瓶が出土している。また精査時には非ロクロ成形の土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・鉢・円面硯が出土している。



20 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	器種	外　　面	内　　面	残存	法量（cm）			写真番号
							口径	底径	器高	
1	20Tr・精査	須恵器	蓋	回転ヘラケズリ、ヨコナデ	ロクロナデ・ヨコナデ、カエリ貼付	1/4	10.0	－	(1.4)	4-5
2	20Tr・掘削	須恵器	円面硯	ロクロナデ、突帯貼付 脚台部外面に縦方向の線刻３条	ロクロナデ	1/6	脚部径 17.8	突帯径 18.8	(4.0)	4-4
3	20Tr・掘削	須恵器	鉢	ロクロナデ、平行タタキ→軽いナデ	ロクロナデ	1/5	46.6	－	(7.9)	4-6

第 28 図　20 トレンチ出土遺物

21 トレンチ

21 トレンチでの調査は 11 月 20 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 70 ㎝下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝、東西溝、土坑であり、遺構の覆土は大部分が黒色粘質シルトである。検出時には灰白色火山灰はみられない。遺物は溝内からは須恵器甕、土坑からは非ロクロ成形の土師器甕が出土している。また精査時には非ロクロ成形の土師器甕のほか、東海地方で生産された可能性がある須恵器甕が出土している。

23 トレンチ

23 トレンチでの調査は 11 月 18 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 30 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝がある。この溝跡の覆土は上層が暗褐色粘質シルトであるが、下層は黒色粘質シルトである。遺構の深さは確認面より約 80 ㎝ほどを測る。なお、灰白色火山灰はみられない。遺物は出土していない。

24 トレンチ

24 トレンチでの調査は 11 月 25 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 50 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘土上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。なお、本トレンチは他のトレンチの堆積状況とは異なり、水田面の直下に黒色粘質シルト層が

10 ～ 20 ㎝の厚みをもって堆積していた。

25 トレンチ

25 トレンチでの調査は 11 月 18 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 30 ㎝下で確認したにぶい黄褐色砂上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。なお、本トレンチは水田耕作土の直下でみられる砂層が、他のトレンチよりやや厚く遺存していた。

26 トレンチ

26 トレンチでの調査は 11 月 18 日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から 40 ㎝下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝がある。遺構の覆土は上層が暗褐色粘質シルトであり、検出時には灰白色火山灰はみられない。溝の走方向から 23 トレンチで確認した南北溝と同一遺構であると考えられる。遺物は出土していない。

Ｃ．考察

遺物について

今回の調査では１～５、９～ 11、13 ～ 21 トレンチで遺物が確認されている。分布状況としては対象地西側ほど多い傾向にあると言える。また出土した遺物では非ロクロ成形の土師器が最も多く、次いで須恵器、ロクロ成形の土師器が多くみられる。なお、図示できなかった東海地方で生産された可能性がある須恵器については写真で示した。以下に図示した遺物を中心に出土遺物の概要を述べる。

出土した遺物の年代観は、最も古いもので第 25 図２の非ロクロ成形の土師器赤彩甕があり、６世紀前半頃とみられる。ただし、この時期の遺物はこの１点に留まる。第 28 図１の須恵器蓋は７世紀後半頃の年代観が考えられる。８世紀代とみられる遺物は第 25 図１の須恵器高台坏、第 28 図２の須恵器円面硯がある。高台坏の高台内では墨書が認められるが、現時点で文字の判読はできなかった。また、円面硯については縦方向の線刻がみられ、脚部には突帯が１条めぐる。９世紀代の遺物としては第 24 図１の須恵器坏がある。外底面は回転糸切後無調整であり、底径が小さいことが特徴である。

遺構について

遺構の分布についても遺物と同様に、対象地西側で多く確認されている。特に４・９・14・19 トレンチにわたって確認された大溝を境として、確認される遺構の種類も異なる。

南北大溝は上幅３～４ｍ、下幅２～３ｍ、深さ１ｍほどであることが、４・19 トレンチ内での掘り下げで判明している。堆積土はレンズ状を呈する自然堆積であり、いずれのトレンチでも最上層で灰白色火山灰の堆積を確認している。立面形態は逆台形、あるいは箱形である。最南端の４トレンチ、最北端の 19 トレンチは約 100 ｍ離れているが、同様の立面形状・土層堆積であることから同一の遺構である可能性が高い。なお、4・19 トレンチでは調査区外へ延びることが確認されていることから、全体の規模はさらに大きくなる。年代を明確に示す遺物は出土していないが、堆積土内から非ロクロ成形の土師器が出土していることを考慮すると、奈良時代頃の所産である可能性がある。

この大溝の東側では小溝状遺構群や東西溝が確認されているのに対し、西側では柱穴や土坑が多く確認されている。特に 16 トレンチでは一辺が 80 ～ 100 ㎝ほどの長方形を呈する柱穴が複数存在しており、周辺には掘立柱建物跡が存在する可能性が考えられる。今回は小規模な調査のため全体像は不明であるが、円面硯の出土や南北方向に直線的に延びる大溝などからは官衙的な遺構の存在も予見でき、対象地の西側については今後の調査の中で特に注視していく必要がある。

かめ塚西遺跡全景（南西上空から）

かめ塚西遺跡全景（南上空から）

写真図版２

かめ塚西遺跡全景（西側上空から）

１トレンチ全景（南から）

３トレンチ全景（南から）

４トレンチ全景（南から）

４トレンチ大溝（北から）

写真図版３

13 トレンチ全景（南から）

13 トレンチ大溝（南東から）

14 トレンチ全景（南から）

15 トレンチ全景（南から）

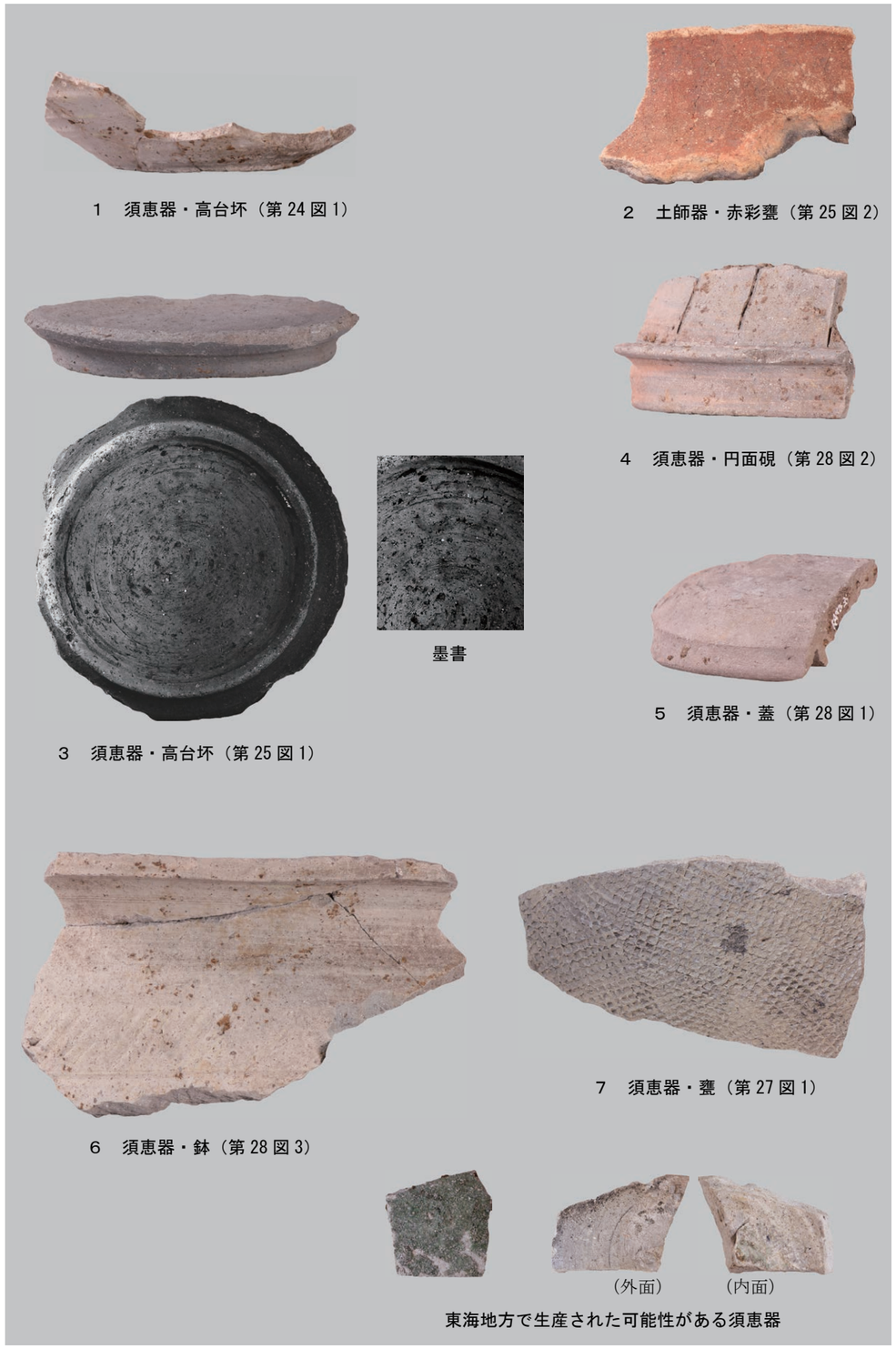
16 トレンチ全景（南から）

17 トレンチ全景（南から）

19 トレンチ全景（南から）

19 トレンチ大溝（北から）

写真図版４



４．中ノ原遺跡（第１次調査）

対象地は中ノ原遺跡の中央部に位置している。地形的には岩沼西部丘陵の東麓に立地している。対象地の地目は荒蕪地である。現地調査の際には遺物の表採はできなかった。

令和元年 10 月 23 日付けで駐車場造成工事に関する協議書が提出された。提出された計画では部分的に切土し、派生した残土を対象地北側の低湿地部に移動し、さらに砕石敷きの駐車場とするものであり、遺構・遺物が存在していた場合には遺跡へ与える影響が懸念された。このため、切土部分については事前に確認調査を実施することにした。

第 29 図　中ノ原遺跡位置図（1/10,000）

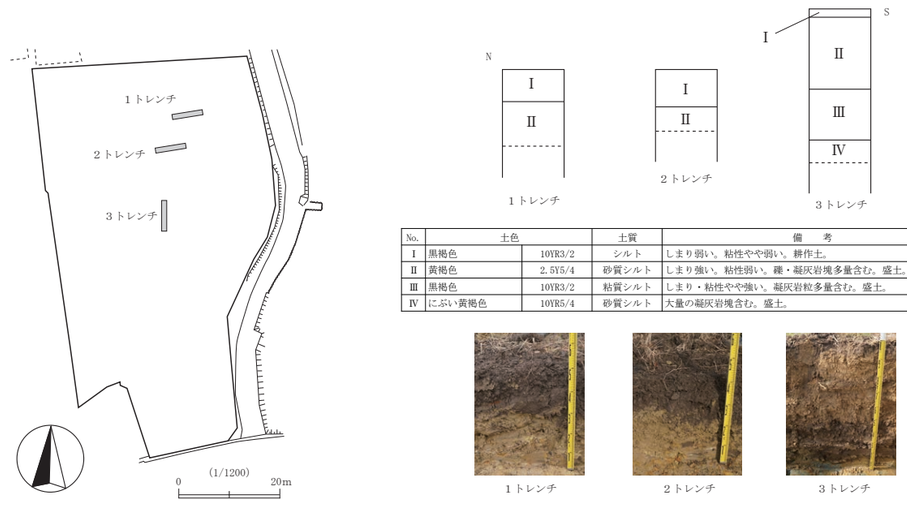
調査は令和２年１月 14 日に開始した。まず標高がやや高い対象地南側では東西１ｍ､南北６ｍのトレンチを設定し（３トレンチ）、標高がやや下がる北側部分では東西６ｍ、南北１ｍのトレンチを２箇所（北から１・２トレンチ）設定した。

１トレンチでは、重機を用いて根切り底となる現地表下 50 ㎝まで掘削した。確認できた土層は２層であり、Ⅰ層は表土、Ⅱ層は盛土であることが判明した。遺構・遺物は確認されていない。

２トレンチも根切り底となる現地表下 40 ㎝まで重機を用いて掘削したが、確認できた土層は１トレンチと同様であり、遺構・遺物は確認されていない。

一方、現在では標高がやや高い３トレンチでは、現地表下 100 ㎝まで重機を用いて掘削した。ここで確認した土層は４層に大別できたが、いずれも自然堆積ではなく盛土であることが確認された。遺構・遺物は確認されていない。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



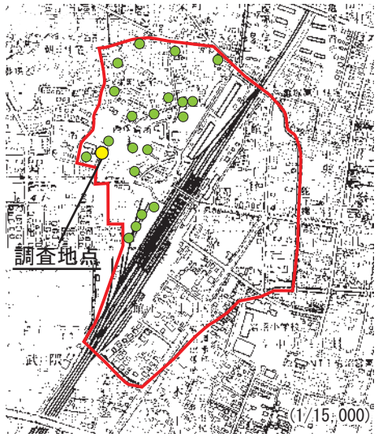
No.	土色		土質	備　考
Ⅰ	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。耕作土。
Ⅱ	黄褐色	2.5Y5/4	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。礫・凝灰岩塊多量含む。盛土。
Ⅲ	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。凝灰岩粒多量含む。盛土。
Ⅳ	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	大量の凝灰岩塊含む。盛土。

第 30 図　中ノ原遺跡トレンチ配置図・土層柱状図

５．鵜ヶ崎城跡（第 22 地点）

鵜ヶ崎城跡は、岩沼西部丘陵より平野の沖積地に向かって東へ舌状に延びた段丘端を利用して築かれた中近世の城跡で、現在の鵜ヶ崎公園を中心に立地し、縄文・弥生時代の遺構・遺物も発見されている複合遺跡である。

対象地は遺跡範囲の西側に位置し、古絵図では下中屋敷と描かれている部分にあたり、周辺ではこれまでも住宅工事に伴う確認調査が随所で行われ、その範囲が丘陵下の平坦地にも及んでいることが明らかとなっている。



第 31 図　鵜ヶ崎城跡（22 地点）位置図

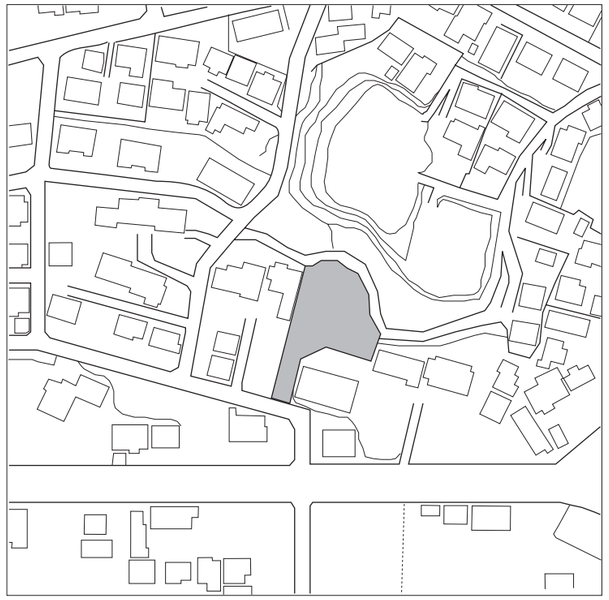
調査に至る経緯は、令和２年２月８日付けで個人住宅新築工事に関する協議書が提出され、現地調査では既存住居があったため遺物の採取はなかったが、その建築工法が現地表の下に深さ 6.5 ｍまで鋼管杭を 58 本打ち込むものであることから、遺構・遺物が存在した場合、遺跡への影響が著しいと考えられるため、工事着手前に確認調査を実施する必要が生じたためである。

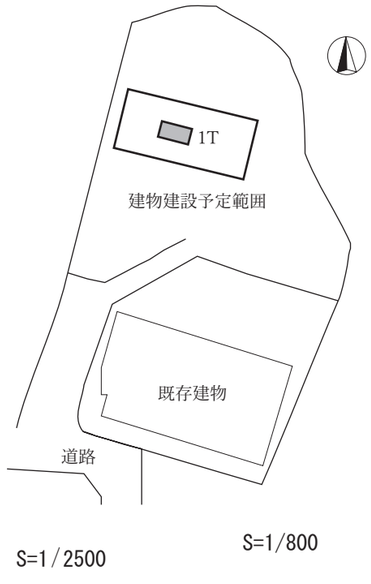
調査は令和２年６月９日に行い、建物建築予定範囲内の中央に東西４ｍ、南北２ｍのトレンチを１本設定し、重機を用いて表土である基礎埋土を掘削後、現地表面から 125 ㎝下までのⅠ～Ⅴ層を、順次重機と人力によって掘削及び精査を行った。

その結果、Ⅰ層は暗褐色粘質シルトでほぼ水平に厚く堆積しているが、Ⅱ層黒褐色粘質シルト、Ⅲ層暗喝色粘質シルトは東半、Ⅳ層オリーブ黒色粘土は西半に堆積し、何れも炭化物粒、黄褐色シルトブロックを含んでおり、Ⅴ層は黒褐色粘土で酸化鉄分が散見していた。

表土の基礎埋土からは陶磁器細片と砥石が発見されたが、Ⅰ層以下からは遺構・遺物共に発見されなかったため、土層記録作業、写真撮影後に埋戻しを行い、同日調査を終了した。

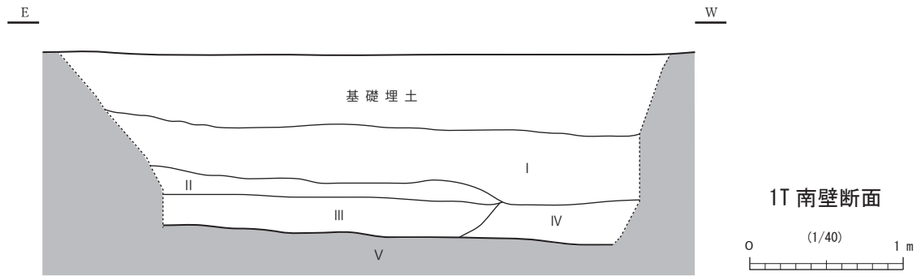
空中写真（南から）





１トレンチ完掘（南から）

１トレンチ南壁（北東から）



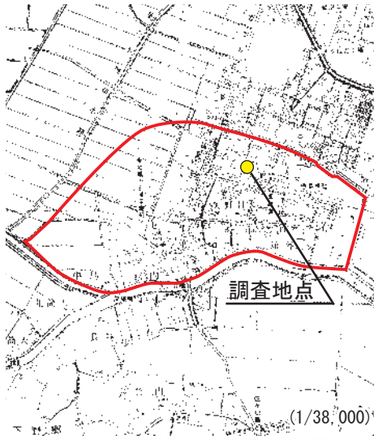
基本土層注記

No.	土色		土質	備　　考
基礎埋土				盛土層。しまり強い。砕石・瓦礫を多量含む。
Ⅰ	暗褐色	10YR3/4	粘質シルト	炭火物粒を少量含む。黄褐色シルト小ブロックを含む。しまりなし。
Ⅱ	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	炭化物粒を微量含む。黄褐色シルト小ブロックを少量含む。しまりややあり。
Ⅲ	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	炭化物粒を微量含む。 黄褐色シルト粒を微量含む。 しまりあり。
Ⅳ	オリーブ黒色	10YR3/1	粘土	炭化物粒、黄褐色シルト小ブロックを少量含む。しまりあまりなし。グライ化。
Ⅴ	黒褐色	10YR2/2	粘土	酸化鉄分粒が散見する。しまりあり。

第 32 図　鵜ヶ崎城跡（22 地点）トレンチ配置図・基本土層図

６．下野郷館跡（第 31 地点）

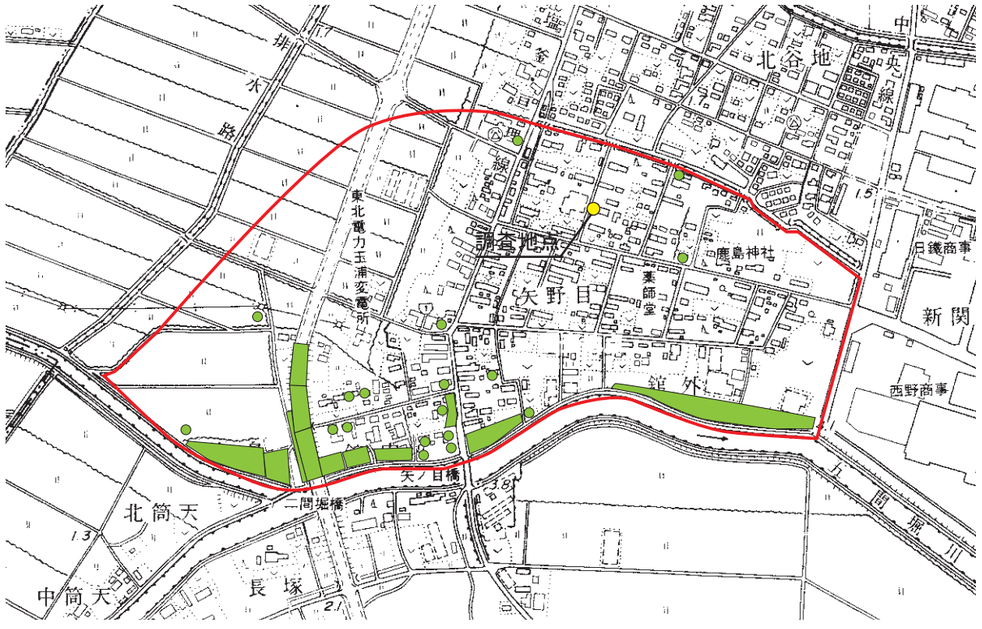
下野郷館跡は、本市の北東に位置する近世足軽集落の屋敷跡を中心に、古代・中世の遺物も出土している複合遺跡で、その立地は標高１ｍ前後の自然堤防、浜堤に位置し、南には五間堀川が東流している。対象地は遺跡範囲の北側に位置し、東側には薬師堂・鹿島神社がみられるが、近隣では近年、宅地化や工業団地として工場等の立地が進んでおり、これらに伴う確認調査や県道の改良工事、河川改修工事に伴う発掘調査が実施されている。



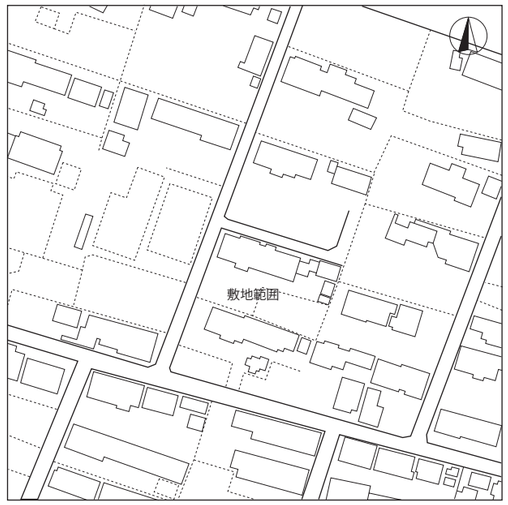
第 33 図　下野郷館跡（31 地点）位置図

調査に至る経緯は、令和２年５月 13 日付けで個人住宅建替工事に関する協議書が提出され、地表面より約 160cm 下まで地盤改良を行う計画であり、これまでの調査で遺跡内の遺構確認面が深さ 80 ～ 100cm であることから、遺構・遺物が存在した場合遺跡への影響が大きいものと考えられるため、既存建物の解体後、基礎工事着手以前に確認調査を実施することとした。

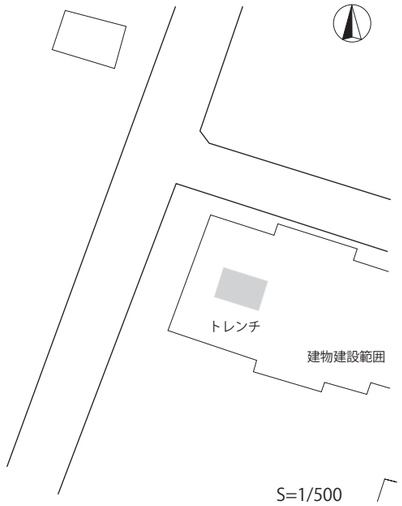
調査は令和２年７月２日に行い、建物建設予定範囲内に東西３ｍ、南北２ｍのトレンチを設定し、重機・人力を用いて現地表面より 50cm までのⅠ～Ⅲ層を順次掘削及び精査を行った。その結果、Ⅰ層の表土はコンクリート片などを多く含み、Ⅱ層は黒褐色砂質シルト、Ⅲ層はにぶい黄褐色砂質シルトで何れも大きく攪乱されており、Ⅱ層中より相馬焼の碗・蓋細片が出土したが、遺構は確認されなかったため、土層の記録作業、写真撮影後に埋戻しを行い、同日調査を終了した。



第 34 図　下野郷館跡内での調査箇所（1/10,000）



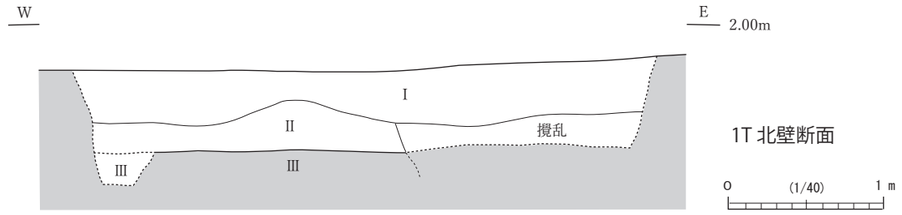
S=1/2500



S=1/500

１トレンチ完掘（南から）

１トレンチ北壁（南から）

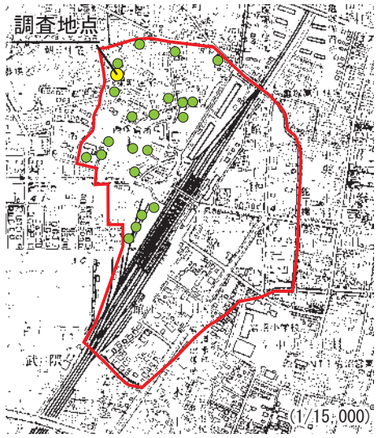


基本土層注記

No.	土色		土質	備　考
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	シルト	表土。コンクリート片などを含む。
Ⅱ	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	微細粒砂を主体とし、炭化物を微量含む。しまりやや強い。遺物を混入。
Ⅲ	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	砂利をごく微量含む。しまり強い。粘性やや弱い。

第 35 図　下野郷館跡（31 地点）トレンチ配置図・基本土層図

７．鵜ヶ崎城跡（第 23 地点）



第 36 図　鵜ヶ崎城跡（23 地点）位置図

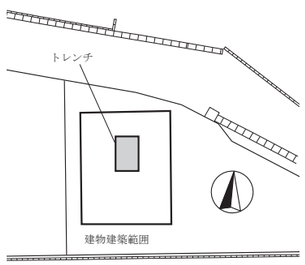
対象地は鵜ヶ崎城跡内に位置する。地質学的には二木・朝日丘陵から北側へ派生した尾根上、もしくは丘陵斜面に立地する。対象地周辺では平成 16 年に 3 地点で発掘調査が実施されているほか、丘陵頂部では東北福祉大学による調査が平成 13 ～ 27 年（2001 ～ 2015）にかけて実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の区画溝等などの遺構、17 ～ 19 世紀後半にかけての遺物が出土している。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館并館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。

令和２年 10 月 22 日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下 5.5 ｍまでのパイル工法による地盤改良工事を行う計画であった。近隣で実施した発掘調査では現地表面から 20 ～ 40 ㎝下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

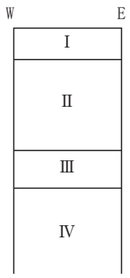
調査は令和２年 12 月２日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西２ｍ、南北４ｍのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下 40 ㎝で確認されたⅣ層上面までを掘削した。調査ではⅣ層中で遺構精査を実施し、表土を覆土とする小ピットを１口確認した。また遺物は出土していない。

以上の結果から、本地点は近代以降の宅地化に伴って丘陵部分を大きく削平した箇所であると考えられた。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査地点位置図（1/4,000）



トレンチ配置図



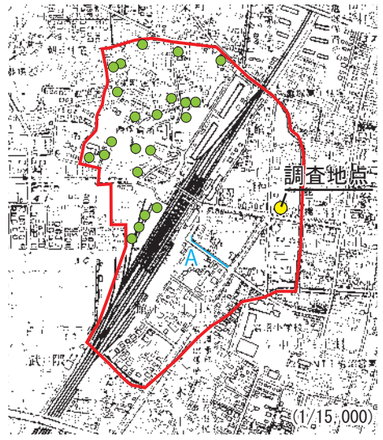
土層柱状図（北壁）

トレンチ土層注記

No.	土色		土質	備　　考
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。表土。
Ⅱ	褐色	10YR4/4	砂質土	しまり・粘性弱い。砂利・小礫を多量含む。盛土。
Ⅲ	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり・粘性強い。凝灰岩小塊を少量、炭化物を微量含む。旧表土。
Ⅳ	にぶい黄橙色	10YR7/2	砂質シルト	凝灰岩大塊を多量含む。

第 37 図　鵜ヶ崎城跡（23 地点）トレンチ配置図・土層柱状図

８．鵜ヶ崎城跡（第 24 地点）



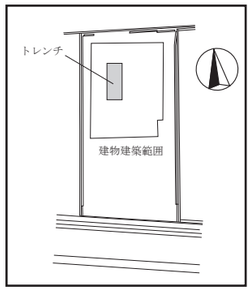
第 38 図　鵜ヶ崎城跡（24 地点）位置図

対象地は遺跡範囲の中央部東端付近に位置する。第 38 図に示しているように、本遺跡内ではＪＲ岩沼駅の西側で調査事例が多く、駅東側での発掘調査は令和元年度に実施したＡのみである。Ａでは現地表面下約 80 ㎝で検出されたにぶい黄褐色粘質シルト上で古代や近世・近代の遺物、柱穴などの遺構が確認されている。この土層は調査範囲内ではほぼ平坦であるが、本丸前面に存在した堀へ向かって緩やかに傾斜していた。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館并館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、本丸前面に位置する広大な屋敷地として描かれている部分の一画であり、東側には丸沼堀が南流している。

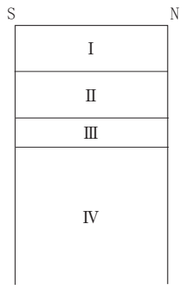
令和２年 11 月 25 日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は当初はベタ基礎の予定であったが、その後の地盤調査の結果から軟弱地盤であることが判明し、地盤改良工事を行うこととなった。このため、前述のＡ地点での成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和２年 12 月 24 日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西２ｍ、南北３ｍのトレンチを設定し、重機を用いて既存住宅の盛土を除去したところ、現地表下 40 ㎝でⅣ層を確認した。ところがⅣ層中からガラス片などが得られたため、さらに現地表下 100 ㎝掘削を継続した。しかしながら、層位の様相に変化が認められず、さらに下位の様子を探るべく設定したサブトレンチにおいても同様の結果が得られたことから、Ⅳ層は大規模な客土であることが明らかとなった。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査地点位置図（1/4,000）



トレンチ配置図



土層柱状図（西壁）

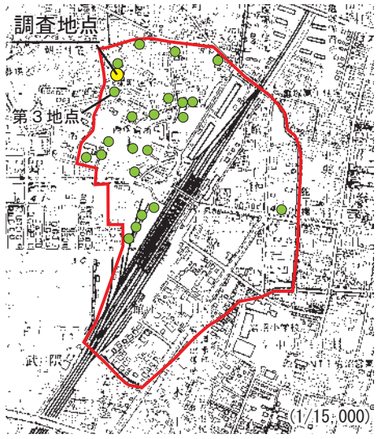
トレンチ土層注記

No.	土色		土質	備　　考
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。表土。
Ⅱ	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。瓦礫・川砂を多量含む。
Ⅲ	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり・粘性やや強い。炭化物を少量含む。ガラス・陶器を混入。
Ⅳ	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物・焼土粒多量含む。陶器・ガラスを混入。

第 39 図　鵜ヶ崎城跡（24 地点）トレンチ配置図・土層柱状図

９．鵜ヶ崎城跡（第 25 地点）

対象地は遺跡範囲の北西部に位置し、第 23 地点に隣接する。この周辺では平成 16 年度に第２・３地点、平成 30 年度に第 19 地点の調査が行われている。特に第３地点の調査では、複数の小規模な掘立柱建物と溝跡が発見されているが、溝は建物内から延び、また覆土中には魚骨などの食物残滓が見られたことから、台所の可能性も考えられている（岩沼市教委 2004c）。第 19・23 地点では、近現代に二木・朝日丘陵から北へ派生する尾根を削平した痕跡が確認できたのみであり、遺構・遺物はみられない。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館并館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。

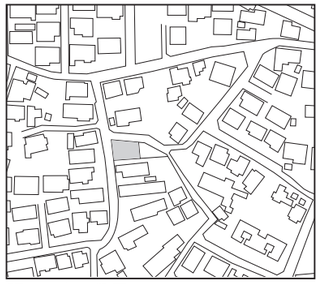


第 40 図　鵜ヶ崎城跡（25 地点）位置図

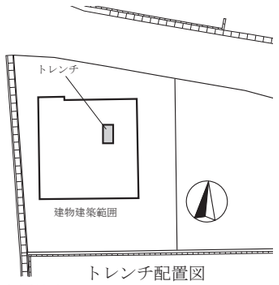
令和２年 12 月９日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下 5.0 ｍまでの柱状改良工法による地盤改良工事を行う計画であった。前述のとおり第 19・23 地点では遺構・遺物は確認できなかったが、第３地点では現地表面から 20 ～ 40 ㎝下で遺構が確認できる状況であったことから、遺構・遺物が遺存していた場合に遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和３年２月 12 日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西２ｍ、南北３ｍのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下 30 ㎝で確認されたⅢ層上面までを掘削した。ここでは表土を覆土とする小ピットが１口確認されたが、遺物は発見されなかった。その後、現地表面下 70 ㎝までの掘り下げを行ったが、凝灰岩を基盤とする岩盤面が確認できたのみであった。

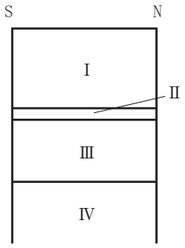
以上の結果から、本地点も第 23 地点同様に近代以降の宅地化に伴って丘陵部分を大きく削平した箇所であると考えられた。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



調査地点位置図（1/2,500）



トレンチ配置図



土層柱状図（南壁）

トレンチ土層注記

No.	土色		土質	備　　考
Ⅰ	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。表土。
Ⅱ	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。Ⅲ層小ブロックを多量含む。
Ⅲ	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	しまりやや強い。粘性弱い。凝灰岩小・中塊を多量含む
Ⅳ	にぶい黄橙色	10YR7/2	砂質シルト	凝灰岩盤層。上層には破砕した凝灰岩大塊を多量含む。

第 41 図　鵜ヶ崎城跡（25 地点）トレンチ配置図・土層柱状図

【引用・参考文献】

生田　和宏　2003 「城柵官衙遺跡における陶硯の様相－多賀城を中心として－」『古代の陶硯をめぐる諸問題－地方における文書行政をめぐって－』奈良文化財研究所
岩沼市史編纂委員会　1984 『岩沼市史』 岩沼市
岩沼市教育委員会　2004a 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第２集
岩沼市教育委員会　2004b 『鵜ヶ崎城跡・第２地点』 岩沼市文化財調査報告書第３集
岩沼市教育委員会　2004c 『鵜ヶ崎城跡・第３地点』 岩沼市文化財調査報告書第４集
岩沼市教育委員会　2005 『鵜ヶ崎城跡・第４地点』 岩沼市文化財調査報告書第６集
岩沼市教育委員会　2018a 『原遺跡第２次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 19 集
岩沼市教育委員会　2018b 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第 20 集
岩沼市教育委員会　2019a 『原遺跡第３次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 21 集
岩沼市教育委員会　2019b 『市内遺跡調査報告書１』 岩沼市文化財調査報告書第 22 集
岩沼市教育委員会　2020a 『原遺跡第４次調査概要報告書』 岩沼市文化財調査報告書第 24 集
岩沼市教育委員会　2020b 『市内遺跡調査報告書２』 岩沼市文化財調査報告書第 25 集
岩沼市教育委員会　2021a 『原遺跡第１次調査ほか』岩沼市文化財調査報告書第 26 集
岩沼市教育委員会　2021b 『原遺跡第５次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第 27 集
岩沼市史編纂委員会　2015 『岩沼市史』第４巻　資料編Ⅰ　考古
岩沼市史編纂委員会　2018 『岩沼市史』第１巻　通史編Ⅰ　原始・古代・中世
関根　章義　2014 「古代陸奥国における陶硯の受容と展開－城柵官衙遺跡を中心として－」季刊『古代文化』第 66 巻第３号　古代学協会
千葉　宗久　2015 「Ⅱ．４－１　かめ塚古墳」『岩沼市史』第４巻　資料編１　考古
辻　秀人編　2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
東北福祉大学吉井ゼミナール　2011 『鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）第 10 次発掘調査報告書』
宮城県教育委員会　1981 「長者原貝塚　上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第 78 集
宮城県教育委員会　1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書第 159 集
宮城県教育委員会　1996 『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編』宮城県文化財調査報告書第 171 集
宮城県教育委員会　1997 『山王遺跡Ⅴ－第２分冊（伏石地区・考察）－』宮城県文化財調査報告書第 174 集
宮城県教育委員会　2018 『山王遺跡Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第 246 集
宮城県多賀城跡調査研究所　1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　2013 『多賀城跡木簡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ
村田　晃一　1994 「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『古代官衙の終末をめぐる諸問題　第１分冊問題提起・各地方の概要』 東日本埋蔵文化財研究会
村田　晃一　2007 「Ⅴ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
村田　晃一　2018 「陸奥中部における陶硯の生産と消費（１）」『宮城考古学』第 20 号　宮城県考古学会

報　告　書　抄　録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	3
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 28 集
編集者名	川又隆央・武田裕光・兼田芳宏
編集機関	岩沼市教育委員会
所 在 地	〒 989-2480　宮城県岩沼市桜 1 丁目 6 － 20　　TEL(0223) － 22 － 1111
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原遺跡（はらいせき）	岩沼市南長谷字原（いわぬましみなみはせあざはら）	42111	15053	38.05.12	140.51.11	2020.06.10 ～ 2020.06.20 ・ 2020.07.31 ～ 2020.09.08	60 ㎡ ・ 148 ㎡	宅地造成
かめ塚古墳（つかこふん）	岩沼市字亀塚（いわぬましあざかめづか）	42111	15001	38.07.17	140.52.09	2020.12.01 ～ 2021.02.10	340 ㎡	範囲確認
かめ塚西遺跡（つかにしいせき）	岩沼市字亀塚（いわぬましあざかめづか）	42111	15002	38.07.14	140.52.06	2020.11.18 ～ 2021.02.10	750 ㎡	宅地造成
中ノ原遺跡（なかのはらいせき）	岩沼市三色吉字雷神（いわぬましみいろよしあざらいじん）	42111	15054	38.07.14	140.50.32	2020.01.14	18 ㎡	駐車場造成
鵜ヶ崎城跡（うがささきじょうあと）	岩沼市土ケ崎二丁目（いわぬましどがさきにちょうめ）	42111	15023	38.06.47	140.51.41	2020.06.09	8 ㎡	個人住宅
下野郷館跡（しものごうたてあと）	岩沼市下野郷字舘外（いわぬましものごうあざたてがい）	42111	15040	38.07.29	140.54.14	2020.07.02	6 ㎡	個人住宅
鵜ヶ崎城跡（うがささきじょうあと）	岩沼市土ケ崎一丁目（どがさきいっちょうめ）	42111	15023	38.06.55	140.51.43	2020.12.02	8 ㎡	個人住宅
鵜ヶ崎城跡（うがささきじょうあと）	岩沼市館下三丁目（たてしたさんちょうめ）	42111	15023	38.06.43	140.52.00	2020.12.24	6 ㎡	個人住宅
鵜ヶ崎城跡（うがささきじょうあと）	岩沼市土ケ崎一丁目（どがさきいっちょうめ）	42111	15025	38.06.55	140.51.42	2021.02.12	6 ㎡	個人住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡	土師器 須恵器	平安時代の井戸跡を発見
かめ塚古墳	古墳	古墳	墳丘 周濠	須恵器	墳丘は地表でみられる墳丘よりも規模が大きくなることを確認。また周濠の一部の規模を確認
かめ塚西遺跡	散布地	弥生・古墳・古代	大溝 柱穴 土坑	土師器 須恵器 石製品	100 m以上に延びる大溝を確認。また方形の掘方を有する柱穴を確認。
中ノ原遺跡	集落跡	中世	なし	なし	
鵜ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世	なし	なし	
下野郷館跡	集落跡	古代・中世・近世	なし	なし	
鵜ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世	なし	なし	
鵜ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世	なし	なし	
鵜ヶ崎城跡	集落跡・城館	縄文・弥生・中世 ・近世	なし	なし	

要　約

玉前駅家関連遺跡とみられる原遺跡では、遺跡の北縁で実施した第 15 地点の調査において、平安時代の井戸跡と掘立柱建物跡を発見した。掘立柱建物は小規模なものであるが、東側に庇を有するものとみられる。

宮城県史跡であるかめ塚古墳では、周辺の宅地造成計画においての保存範囲を把握するための調査を墳丘南東部で実施し、本来の墳丘形状・規模の一端が明らかとなった。また周濠の外縁も確認されている。

かめ塚西遺跡は宅地造成計画の範囲に含まれていることから、道路敷設が予定される箇所で調査を実施し、直線状に南北 100 m以上に延びる大溝の存在を確認した。

岩沼市文化財調査報告書第 28 集
市内遺跡発掘調査報告書３

令和３年３月
発行　岩沼市教育委員会
岩沼市桜１丁目６番 20 号
生涯学習課　TEL0223(22)1111　内線 573
印刷　株式会社 国井印刷
岩沼市藤浪１丁目４番 35 号
TEL0223(22)2221